096756-001-2

特9-945

義士銘々伝　巻之1，3，4

邑井　一／講演

M30

DBS-0478

古春画

序

蓋聞く、女は已れを愛する者の爲に容づくり、士は已れを知る者の爲に死すと、恩に感ずるの深さを謂ふ耳、徳川時代の四十七義士は正に是れ我が封建制度の花たる者にして、今日より之を論ずるや、(權助の腹切)とも言はんとすれば言はるべしと雖ども、當時の道徳界に於てや是實に歳寒うして松柏の凋むに後れたる者、天下擧りて歎賞せざるは無かりし也、

是即ち天地有正氣、雜然賦流形……時窮節乃見、一々垂丹青る者に非ずして何ぞや、天地正大氣、粹然鍾神州……然當其鬱屈生四十七人とは亦虚ならざる也、

抑も世異なれば、事亦異なり、着眼用心の點亦隨つて變ず、然りと雖も、其精神に至りては終古依然たらずんばあらず、……大石の如きは蓋し仁を求めて仁を得たる者ありけん歟、

泉岳寺に至りて最後の事を思ひ出して

大石良雄

あゝらくや、思は晴、身はすつる、
うき世の月にかゝる雲なし、

眞に然り、眞に然り、

按ずるに四十七義士の傳未だ善美を盡したる者あるを見ず、史料は即ち積で山の如し、殊に江赤見聞記若くは江赤家秘抄の如き尤も信を置くに足る者ならん、

本書は固より講談師の口を以て通俗的に描き去り寫し來れる者、一見俚耳に容れられんことを求むるに似たりと雖も、講談師は東洋の名物にして、人心を鼓勵するに於てや獨得の長技を有す、されば此の銘々傳が江湖に愛誦せらるゝ決して偶然の事に非ず、濶大の精神を以て此等の書を讀まば、斯の滔々として輕薄澆漓に流るゝ世情を救ふに多少の功おくんばあらず、聊か數言をのべて發行者の爲に辨ずと云爾

明治卅年二月十五日　　高橋五郎

特9
945

義士銘々傳

邑井一講演
酒井昇造速記

第壹席

今日より義士銘々傳を申上げます、奥高家肝煎の吉良上野介と云はれた御仁は、強慾にして慈悲を知らず、表高四千二百石は申す迄もなく、高家衆でお高の多いのは吉良殿が最上を召められ其の次が織田、畠山、大澤、右京太夫、此の四家が高家中大祿のお人

奥高家肝煎と云ふは八百俵の御役料が出て、千五百石高で、尤も四千二百石の御仁はお足し高は戴きません、八百石の御役料を頂戴し、財寶倉庫に充満して、悉く富家で在ッしやいましたが、何分御性來備はつて、貪慾と云ふものは仕方が無いものと視にる、又吉良様は千家の家元なり御茶の湯の事で、五代將軍へ御直しを申上げ、其の他諸侯太夫のお弟子數ふるに遑あらず、是で余程お懐入に成ます乃で骨董家が結搆な茶の湯道具を寶買の時に

○「是は何分折紙が確實であい、偽物か正物かを確かめ度ものだが、是は一ッ吉良様に御鑑定を願つたら確かで在らう」と云て奥服橋内の吉良様の御屋敷へ手續を以て、假令ば此の茶碗、此の古道具、此の釜、コレ〳〵申ますが、正真の物か偽物かと瓰別を願ひ度と云ふ偽物だと上野介様が、擬ひあい正物だと云つて、幾らかの鑑定料を取て折紙を書てお渡しあさり、真物を持て來ると

いふと、吉「是は真赤いナ偽物である、能く出來ては居るが……」と冷評て歸す、道具商は落胆して居る處へ家來を町人に扮裝て廻はし、之を廉價く買取らして御自分が正真正銘の箱書をし、折紙を附て弟子内の大々名に價をよく寶附るとは誠に是れ御旗本の所爲とは思はれませんやうな譯、淺野内匠守様の事件の前に此の人(吉良上野介)が二度命を拾つた事がある大概あらば夫から後悔をし、行ひを慎み、貪慾を改め可きだが、何うも死ぬ迄附て廻つた强慾、爲方がない、德川様の時分に例年三月年始の賀儀として、勅使が京都から東都へ御下向に成る、其の度に三万石以上から拾万石迄の御大名が勅使饗應使と云ふて御馳走役を命せられたもの、短命のお大名は之を勤めずに終ひ、極長生あさる芽出度殿様は二度も御勤役あさる事が有る、最も金子の要る誠に忌おお役、元祿十二年の天奏饗應使を命せられたるのが、石見

國津和野の城主四万三千石亀井能登守殿が右の大役を命せらる、其の時能登守殿は年齢二十六歳、謂はゞ水の出端、血氣盛んと云ふ御年齢、御大役で御座るから、御國家老田沼外記と云ふ者が江戸へ出府して万事殿様御勤役の御相談相手、懐刀、現今の秘書官と云ふやうな事で御相談役に成て居ましたが、さて才物でも此の外記は國詰の人ゆえ江戸の勝手は不慣れで万事様子を辨まへません、御馳走役の間は、吉良上野介義英が万事お指圖役、御師匠番、其の吉良殿は前申上る通り貪慾にして賄賂和の下を賂らざる時は殿様に勤めのあらざるやうにする、殘念あがら、進物方の役人へ尊所ソレの指圖を致しませんから通常の菓子折かも何か贈つて置き、黄色イ重寶おものを參らせんから、上野介殿悪とく御立腹、亀井侯御登城有て吉良公へ御用のお問合せが有て少しも御傳達があい、義「只今御用多う……

と云ふて口達

があい、能登守殿は先方が洞察んから周章て居る處へ突然吉良殿が來たり、役人諸侯の居流れる前をも憚らず、痴漢ノ、野呂間ノと云ふ悪口三昧、能登守殿も血氣の御年刀頭前へ手を掛たが、御家、御身分が大切だから、耐へ〳〵て勤役して居ますと、今日も相變らず大勢居流れる中で吉良殿が　義「能登殿、奈是貴公は御役が身に染みさつしやらあい、斯る大役を命ぜられ乍ら、今の中から周章かれるやう、では、早晩御用が立込んで敕答の日柄に成たら氣が逆をふ、イヤサ、頓死も爲やう、四万三千石頂戴する高を考へて見て勤役さつしやい、穀く高丈の御奉公が出來ん者は能登殿取も直さず祿盗人だ　能「ハッ……

と能登守殿勇氣が滿ち脇差の力頭へ手が掛つて、既に斯うよと見にたが　能「イヤ待て雲時、家康公御遺言の御條目の中に殿中にて宿意を以て白刃を揮ひ斯殺致す者は叛群の家柄たり共、其身は切腹、家名斷絶……

突然我短氣か有たら家來共が騒がう、殊に男子だ、今日丈は堪忍して歸邸した上宗老の外記に後事を托して明日、汝上野介出會ふ處を幸ひ、一刀の下に斬て捨るて有らう」と御無念をお耐へあすつたと云ふのは、憚り乍ら藝州の御分家内匠守樣より度度のお廣い處が有たと見る、往時三ヶ俵二人扶持の御家人共の相對おら兎も角も其處に、聽く者が有て　○「ヤイ鈴木、川村、安田汝は祿盜人だ」と云はれゝば止み難なく、其者を斬て棄かければおらん、氣味の惡い武士道とやら云ふものゝ有た時分、況てや四万三千石で二十六と云ふ殿樣の堪忍は譽め度處、御用か濟んで新シ橋角の御屋敷へ　△「御歸り」　重役か玄關へお出で迎ひ申すと能登守殿の御容子が不快、憂障はりる荒々しく、ぴ表の御居間へ……　能「コレ外記を呼べ、暫時人拂ひ申付ける、外記を早く此へ呼べ　田瀬外記能出て　外「エー今日は御用濟りあく相濟み御

退出、恐悦に存します、　能「ウム、外記其方に些と改めて申聞け度事が有る、コレヘ〳〵近うコレヘ〳〵　外「ホ、ホー　能「外記其方は予に諫言致すか、致さんか、夫を一應聽き度、諫めると云へは明さすに覺悟をする、諫めぬと云へば申聞ける、何うじや」と唐突に、ハッと驚く胸の浪、外記は顏を蹙げて　外「異な上意を承ります、先御明しを願ひ度もので御座い升、御宜しい事あらば勿論、中し、お惡い事あればお諫め申すが私の職掌かと心得て居ます、何うか仰せ付られはするやうに……　能「イヤ最う要はない、汝は諫言する氣だ、云はずに覺悟をする、退れ、立て　外「ヘエー　外記が御主人の顏をシケ〳〵見上げると眼に殺氣を帶び額に青筋を顯はし喜怒骨動き必死の御容貌三人五人の忠臣有て死を以て諫めると雖とも御聽入のない御相樣、　外「エー此度の御大役に付て私遊々石州から出府致し万事御内密の御相談相手に相

成て居るもの、何事か麁事出來い致す折には少しも知らん、辨まへぬと申ては江戸出家中の者が承知致しますまい、宜しう御座いますす御諫言を致しますまい、仰せ聞けられますやうに……

次に遠慮して置いた脇差を取寄せ

熊「イヤ夫で宜しい

熊「キンテウしろ　外「ハッ

小刀を拔いてキンテウして御覽に入れる

外記別ではない、予が勤役の始めから師匠番上野介に万事に問合せをすれば只今は御用多は、後刻に、と云ふて奥の小座敷へ引いた限り予は遽てゝ相勤めて居る處へ何時か來て、諸侯役人の居洗れる前をも憚らず、予に云ひ難い雜言過言、不禮の惡口、今迄は堪忍して居たが、今日と云ふ今日は大勢居洗れる前て予を捕へて祿盜人と云ひ居つたが何んと堪忍成るまい、其場を去らず斬て棄やうと思ふた、が彼を殺せば予も切腹、家名斷絶、もしや家臣等が料見違ひをして籠城の色めきが有てはあらん、予が死ん

だ後の事を其方に托せん爲め是迄殘念の胸を納めて立歸て參つたが、明日は宥さん、出會ふ處を幸ひに老幼を眞二ッ、反す刀に切腹する家が滅れやうが是迄の時節と其方から家中の壯士等を理會して貯への軍用金が澤山有るから之を一家中へ困らぬやうに分與へて津和野の城渡しは禮を厚く致し呉るやうに願むと云ふ此の一言、諫めるとも斬る、諫めずは倘討つ、予が心は鉄石心ぢや」と仰聞けられ、惚り惚いた田舎外記、併し大忠臣、學者なり才物ゆゑに是も堪立つ心を押鎭め　外「能く堪弁してお歸り遊ばしました、六十五才の私さへ御言葉を承つて居る中に、思はず齒齦を咬締め拳を握つて殘念に存じ升た、御若年の尊體さま能く堪忍してお歸り遊ばし升た、ナニ御異見を申上げませう明日は立派に御武士道をお立遊ばし升やうに、忠孝両様全からず、御當家御先祖様には御不孝に成ます、太閤秀吉公のお感むれ

に「法は釋迦武藏は龜井武藏守、天上天下唯我獨尊」と名將秀吉公のお言葉有りし名家も君の御代で跡を殘さず斷絶、武藏守樣へは御不孝なれ共、何うも亦武士道の恥辱は棄難し後は御恥辱の殘りませんやう取計ひ申ます、から明日のお出會いの節上野介を斬てお棄遊ばすお覺悟で在らせられますか　能「イヤ云ふにやおよぶ、孫て髻髮だちから習ひ覺にた眞影流、明日は長光を差して行き彼の姿を見るや否や躍り掛つて腦上から只一刀に売竹割……

外「ア、イヤ其處丈かふ若いかと思はれます、斬掛る一ト刀、先方に早業が有れば躱を躱され、二ノ刀は餘程暇取れるもの縱令吉良殿に手傷を負はすも淺傷あれば療治が屆きます、明日は怒氣を面に出さず、平日より御機嫌克柔和に粧ひ、吉良殿の側へお寄遊ばしまして油斷を見澄まし、扶手も見せずお差し遊ばせ、突傷は深くなくも療治が屆きかねます、是丈心添へ申上げ

ます。

能「ウム、能い處に心附いて奥て誠に喜こばしい、外「今晩は御奥へ御寮あり、餘所から奥方樣へ御別れを……

能「イヤ斯う成て奥や稚子に心は殘らん、表の居間にて勇氣を練つて明日出仕の時刻を相待つ事に爲やう、外記訣別の盃を遣はし度が他の家來共に色めいてはあらんから、盃は遣はさん」と表の御居間へ御夜具を展させ立上つて能登守殿は小諸を諸ふて御表の御居間小坐敷へお引きに成ました、折柄鳴渡る四ッの時計、兩手を組んで田溜外記

外「さて大事出來した、明日我君御登城に成れば御家斷絶、ハテ何うしたもので有らう……何にも吉良公が左のみ意恨を呻み給ふ主意はないが噂に聞く上野介殿は强慾にお生れあすッて賄賂苞苴を取り、卑劣な御計ひが有ると云ふ風聞を此頃耳にしたが、万一其の筋の不行屆から出て居る底意ではあからうか知ら、其んなら賄賂を贈たら吉良殿の氣色も

直つて御家に瑕瑾も附くまい、四万三千石の家を買ふやうなものの有る、届くか届かぬいか、一應手を入れて見やうと胸に問ひ腹に答へて何人にも相談をせず、己れの料見で御納戸役に云附けて、紗綾、綸子羽二重、縮緬を進物に仕立、波瑠徳利五ッを御納戸役から出させ、御金方へ云附け、小粒で五百両、百両ッゝ右のフラ底へ入れて保命酒と云ふ銘を貼て表向銘酒に仕立、釣瓶に載せ外記は自身馬に乘て新シ橋内の亀井の屋敷を出て呉服橋の吉良殿の屋敷へ來たは彼是れ子刻と云ふ刻限、闇と御門番も熟睡端の様子、外記は馬から下て門を敲いてトン〳〵トン

外「御門番ェ〳〵」

○「ア、ア、アー、誰だ」

外「エー亀井能登守の臣、田渕外記と申す者、明日急御用に就て、六ケ敷い事あがら御目通り願ひ度罷出ました、御開門下し置れますやうに……」

○「アイ」

△「なんだ」

○「ナニ亀井の使者が斯う〳〵」

△「イヤ打棄て置け〳〵、今

年のやうな譯の分らぬへ御馳走大名が在るものか、毎日〳〵五度も六度も門を出入して居るが、門番に酒の一合も買ふ事も知らん、斯云ふ大名の言ふ事をオイそれ〳〵聽くと天奏の名義が悪く成る、幸ひ寒い晩だ、風吹きの處で些と涼ましてやれ〳〵、眠た假似をしてエて挨拶をする外「アゝ困たもの、今夜持參の賄賂が届くか、届かぬか、辻占と云ふ事も在る、一ッ門番から手入をして見やう……失禮あがら伺ひますが此の御門番はお泊りはお幾人で御座いませう

○「お組頭妙なる氣で御座いませう

△「斬込む氣でだらう

○「夫は剱呑……

△「何にしろ面白さうだから泊番は四人だと答へろ

○「エー四人で御座る

外「甚だ恐入りましたが、お忍からお手を拝借致し度うせてエます

△「其奴ア面白い新役だ貴分手を……

○「お組頭使者が手を一手借

○「新役は

危険い處へ遣はれる」愚圖々〳〵云ひながら酒屋の潜に四角イ小さい口が有る、旗木屋敷にも忍と云ふ四角イ小さい窓を開けて怖々〳〵手を一本出す　外「主人が毎度御門を出入りを致し御面倒……是は少分で御座るが酒代を献上致します、宜しく御記常を……　壹分銀を八個冷つこく手に殺られ　○「ヘエ〳〵……お組頭二両の酒代を……只今開けます　△「早くお玄關へ……一人が草履下駄を突掛て横ッ飛に飛んで來て　○「お頼申ます〳〵　◎「あんだ　○「お泊番は誰方　◎「柳原元右衛門だ、案下が燈て寒くッて眠られん　○「少々〳〵御門の鍵をお借申したいので　元「今時分何んだ　○「鎧井の使者が參りまして斯樣〳〵、御門を開けて通して……　元「ナニ能登守の使者だ打棄て置け〳〵、あんな眼先の見にない大名てエものが有るものぢやアない、弱々〳〵大名が增長して終ふから打棄て置け

○「其お事を被仰らず、折角寒い晩に來ましたンでげすから門番丈の親切が見せたいから門を開けて通したら　元「鍵は夜の四ッ時に成ると御目附へ上つちまふ、明日の朝六ッに鍵を請取るんで、今俺の手許にはない　○「夫は家例に成て居ますが目下天下泰平で何事も無いから、持てッたり持て來たりするは面倒だからガラ〳〵お前さんの枕元に門の鍵の有る事を知てますから、其ンお意地の惡い事を被仰らずに鍵を貸して下さる譯には參りませんか、　元「鎧井の使者に大層肩を入るナ、何んぞ面白い事でも有たか　○「イエ少し手役が有たから通してやり度ので　元「ウム、何の位　○「氣の附いた者も出來たものかして　元「相變らず鎧井さまを威壓たから氣が附いたかナ、幾ら貰つた　○「二分に有付いたので　元「御馳走大名は大概二分だ　○「イエ四人に貳分ッヽで貳兩……鍵は其處に有る、持て行け

門番は鍵を持て飛んで行く、外記は門から這入て參りお玄關へ係る、榊原元右衛門は、生欠びを爲ながら、袴腰を捻て　元「アヽ寒のにお使者御苦勞……　外「明日御急用に就て憚りながら上野介樣へ御目見仕り度宜しく御取計ひを願ひ上度御座る　元「畏まり升た、奥へ申込んで見ませう……俺は無謝か知らん　と元右衛門溢々立つを　外「失禮あから御胯腰が曲て居り升　とヒョイと戦けた紙包み、　元「是は憚り……　廊下を歩行き乍ら手を遣て見る、重い紙包み、錆た鐵網行燈を捧立て紙包を開く、拾兩小判の光り、元右衛門は悦び慾に眠氣も醒め急ぎ足　元「御頼み申ます、奥締御泊番は誰公　治「戸川治兵衛だ、元右衛門何だ　元「龜井の使者田潮外記と申す者罷出、明日御急用に就てお目通りを願ひます、と餘程の御用と見ます、何うかお會ひに成るやうお取計ひを願ひます　治「左樣か、申入れて見やう　奥へ來て見

ると酒の強い吉良殿、御酒宴最中美麗な腰元共が三味線を弾き踊を踊て居る　治「へエ申上げ升、　義「治兵衛何んだ　治「龜井様からお使者が參りましたが、如何で御座ひます、お會ひに成ますか承り度存じます　義「ナニ龜井の使者が能登守と云ふ奴は眼先の見にん、大痴漢、予に大役の師匠番を委ねあがら半紙一枚贈る事を知らず、日々殿中で悪口雑言はじめ廻はしても更に心附かず、此の寒ひ夜に使者に會ふたら折角酔た酒も醒めて終う、今夜は寢に就たから明日黎明に來いと云つて追歸せ何んの事だ　治「へエ、　治兵衛は元の詰所へ參つたが、御寢所にお這入りに成り御眠付きの處だ、お目醒を申上げると御癇癖に障つてお憤りあさる、から明日早く來るやうに諭して歸すが宜ひ　元「夫でも今迄は三味線の言や踊の足拍子……　治「何んお音がしても今夜の事には行くまい、　元「大き

に有難う……

第二席

元右衛門は詰所へ來て　元「さて外記殿、お奥へ申込みました處御重役の言葉に最ふ主人は寢に付いたから今晩は迚も行くまい、明朝お出るやうにとの事で御座るか何うも合點の行かぬは主人の居間の方で三味線の音、踊の足拍子がケタ〳〵、まし く聞にますが私の身分はお玄關番で御座るから奥口より内へ入る事が出來ませ無、乃で奥用人の粕谷平馬を拵へて見ませうから暫時……」　外「イヤ色々お取計ひ過分で御座る」　粕谷平馬は奥御用人筆頭、今書物が濟んで居に附いた墨を拭き乍ら御内室に酒の準備をさせて飲もうと云ふ處へ草履下駄を突掛てから〳〵柳原元右衛門が遣つて來る　平「さあ〳〵此方へお這入り、今夜は泊か、俺も四年御玄關番を叩いたが、夏は熱し蚊は居る冬は寒し眠難いナ　元「案下の火を熄しまして　平「夫は寒からふ、今酒を飲み始めた處だ、懷にも案下を入れて行かよかろうサア一盃……　平「ウム　元「砲井能登守家來田淵外記と申す者が殿様へお目通りが爲たいと申すので在り升すから奥へ申込みましたら、戸川治兵衛さま、ふ次で殿様はお就寢だから今晩は會へまいから明日早く來るやうに申せとの事で御座い升が、合點の行きませんはお居間で三味線の音が烈しく聞にますが、折角參りました者を無駄足をさせるも氣の毒、何うか御主君様の方をお取計ひ下さり、お會ひに成るやうに願ひ度いものです　治「ウム、元右衛門評判の悪い龜井の使者に大分肩がは入るか、今夜は何にか面白い事が在て夫ゆえふ會ひになるやうに計らつて呉れと……　元「ヘエ、大分俄かに氣が附きました、御門番四人へ酒代が貳兩の謝禮で御座い升一人貳分

ブ、で、私へ小判十兩の心附け　治「ホー、夫は大した事だ、イヤ何うか取計ふ御玄關は寒ひから暑儀だが俺の小屋へ使者を遣した方が宜からう、火の氣も在るから、此方へお連れ申すやうに

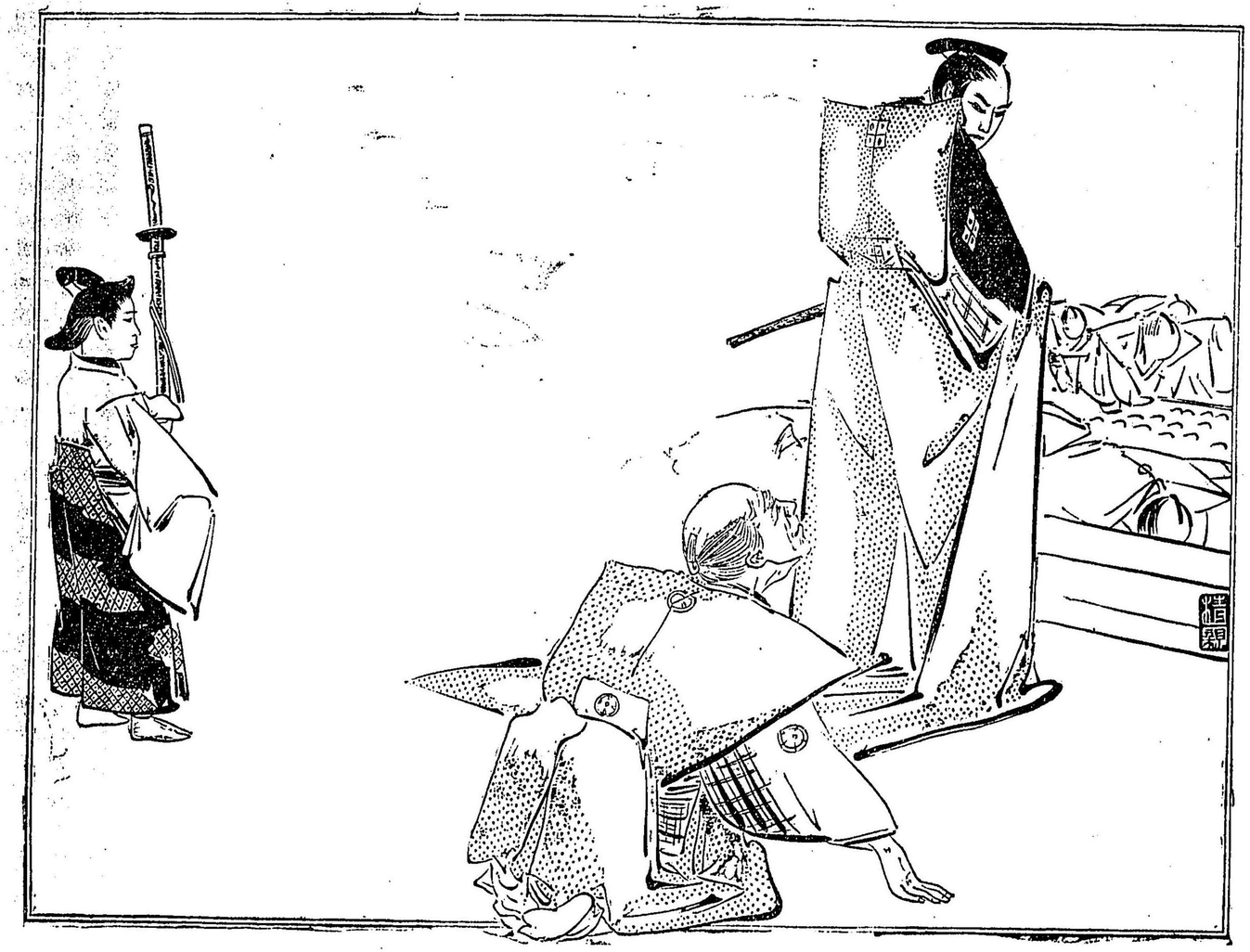
元「長まり升た」　元右衛門再び詰所へ來て　元「お待遠う……用人へ申開け升た處、折角のお出、お無駄足はお氣の毒、何とか取計ひませう、が玄關は火の氣もおしお寒いから暑儀では有るが粕谷平馬長屋へ御案内仕りませう　外「是は色々御盡力有難い事で……　元右衛門に連れられて外記、粕谷平馬長家へ來る取敢ず粕谷が出て始めての挨拶　外「是は利き役者思ひ切てはづまあければあるまい」と思ひお土産として小判百兩出す、平馬は大に悦んで追從タラ〳〵　平「早速奥へ申込んで見ませう　深更の事で御座るから、肩衣には及ばん、袴、羽織、脇差を差して柄の附いた鐵網の雪洞を提げてお玄關からノン〳〵お廊下　平「お

錠口粕谷平馬で御座る　○「ハー、ハー　直ぐと締が開く、お居間へ來て見るとお就寢處か御酒宴の眞最中、　平「へエ……　義「イヤ平馬、未だ寢ぬか、一盃やらう　平「お相手は仕り升うが少々申上げます　義「ナニ　平「細井能登守家來田淵外記……　義「イヤ夫は疾に治平から聽いた、大役の師匠番を頼み居あがら禮物も送らず氣の付やうに虐待やるのも心附かず、寒い夜に會へば折角醉つた酒が醒めて終ふから、寢たと云ひ歸せと治兵衛に……　平「御尤で御座いますが、龜井の家來に心附いた者が出來ましたと見まして今晩のは誠に悦ばしい使者で御座い升て、門番へ酒代が弐両、柳原元右衛門に金子壹百両、上への進物山の如く持參致したやうで、御座いますが使者から進物の目錄を借受けて參り升た、御覽遊ばせ　義「コレ三味線を止めろ、眼鏡〳〵、ウム、紗殺、繪子、羽二重、龜綾、保命酒

五瓶　平「其の五個の銘酒のお德利が御好物で在らせられるかと存じ升　義「イヤ是は會すばかれるまい、治兵衛と云ふ奴はあれッ限の男で最前治兵衛から其の事を聽けば今頃は使者も要事が相果たやうに届かん奴だ、會ひませう、中奥で會いますから早々く呼ぶやうに……　粕谷平馬は長家へ歸て　平「さて外記殿、旦那が就寢て居るのを起して申開けましたら、折角夜中のお出、お無駄足に成るもお氣の毒、取亂しては居るが、中奥で會はうと申されます、　外記は心中　外「アヽ宜かつた、賄賂は納まつた、お表で會へば安心からん、潔白のお役人なら賄賂を背負て歸される事が有る、が中奥でお會ひが有れば賄賂は納さまつたやうなもの……　と悅んで居る吉良殿の泊番の若侍が進物の白木の臺を請取て之を中奥へズーと並べる、外記は平馬に引れて中奥の宋席に控へて居ます、暫く經つと　○「シッシイー　奥の方から

警蹕が掛る、紙門を開けて、お袴はおし、綿入羽織、金作の小刀をお差しゐさッて、総髪で小造りの愛嬌盜れるやうなお爺さま、此人が意地が悪いかと思ふやうで、五代將軍樣は、吉良樣が風引で日登城が無いと　將「上野は〳〵」　と御就寢迄には五度も六度もお聽きおさる、其の勢ひ御用御側も三舍を避けるといふ、近く御愛臣で今お蒲團へパタリ粕谷平馬は中野石翁と云ふやうお御愛が能登殿御使者田湖外記、進物の披露を申る　義「イヤ津和の御使者外記始めて、上野介……　就ては今晩は好物の品を澤山得させて過分々〳〵……　お目に係つた折能登殿にお禮を申す、宜ろしう……　外「ヘエ、お直答は恐入ます、平馬さま迄お答へ仕ります此度主人大役を命せられ、若年ゆゑ如何有らふかと心配致し居ます、した處、御當家樣御引廻はしに依て今日迄滯りなく御役相勤め、誠に一家中悅び居ます、尙此上共何卒御心添の儀を偏へに賞

ひ奉ります　義「陪臣は殿中の容子を知らんから心配は道理ぢやが、能登殿は御器用の御性來チョイと一ト言御用をお敎へ申すと其の先を聽かずに推量でお勤めなさる、今年のやうな師匠番は澤山あい、御用部屋の通りも能く、何うか上野の敎へが届くかのやうに手前迄鼻を高く思はれる、アハ、アハ〳〵」　と輕く溜口　外「夫に就て少々お含み迄に申上置き度御座い升、主人能登守儀明日殿中にて尊公樣に出會申せし時に確と御挨拶申上げねばあらん腦差の刀頭を握つて御挨拶申すと何にか色めいて相見升が、是又一家中一統の心配迄付願ひます、異おものおれど、明日も滯りあく主人勤役相濟み退出仕りまするやう御含みを願ひ上度存じます　義「ハーテな、手前方には更に左樣お覺へはあい、ハテ何云ふ……イヤ是れ外記斯ふで有らう、幾ら壯健自慢を爲ても年を取るといかん、此節眼を病み人違ひをする事度



〳〵、此程も御殿へ出て表坊主と間違へて大目附へ一寸不禮を申した、若盛りの威張盛り、大目附役を權にかッて手前を呼付けて厳しい談判、若年の小奴では有るが、大目附のお役が重いから、大目附部屋へ平突張づて謝罪た時の間の悪さ、多方其の邊で混雜紛れに能登守殿を小役人と心得、心にも無い粗忽を云ふたのを年若の短氣、一圖に怒りやしやつたかも知れぬ、オヽ悔わいゐと〳〵……何にか椿事が有れば予も生られる命を棄て、能登守殿も御家に障る、ヨシ〳〵予が様子を見てお顔色の悪い中はお側へ寄らんやうにして心利いたる表坊主に申付け、御勤の御用抔お殺へ申しお怒氣の解まつた時分お側へ近付き機嫌克風物を扱ふやうにし取計らはん、万事に慣れて居る上野、外記心配致さるヽナ　外「ハッ……心の中にて　外「四位の少將に進み、綾羅金繡を身に纏はれ登い御身分で有りながら心の内の卑劣さは

下郎匹夫の此外記にも遙か劣つた卑劣心、けれ共小人なればと
そ、何うやら御家は安泰らしい、悦ばしい事……　義「外記、當家は
四の日が釜日あれば茶の湯の心得有れば時折參るやうに……
外「田舍侍、甚だ不風流に御座い升、併し在江戸中は御機嫌伺ひに
屢々罷出るで御座い升う、是にて御暇を……　外記門を出て、ホ
ッと一ト息　外「一方は是で宜い、是から屋敷の方が案じられる
と馬を乘立て新し橋内の龜井侯の屋敷へ歸つて來る、夜が白み
御門が開いて御供廻りが揃ふ、其の内に御玄關へ御賀龍が横付
に成る、玄關式臺へ刀持を連れて能登守殿出て參られ、轎輿に乘の
らうとしたが、何んだか心殘りの有るやうに左右を見廻はして
居らせられる處へ、外記馬から飛下り、此の樣子を見て白洲の砂
利を横斜かへにパラ〳〵〳〵飛んで參りまして式臺へ上つて
両手を支へ　外「ハッ、ハッ、ハー、　能、外記、今出仕爲やうと思ふた

が其方の姿が見にんから猶豫して居つた　外「恐入り升す、昨晩
少々心得在て他行致し、只今立歸りました、御登城御苦勞に存じ
ます兼て昨夜申上置きました通り、其の場へお花み遊ばしまし
たら隨分心をお鎮め遊ばし御仕損じの無いやうに……　能「夫
は昨夜、勇氣が立て更に眠りに付かぬから、斯ふしてアヽして、と
順序を心に記臆して置いたから、多分仕損じは致さん胸算、ドレ
潔よく出仕爲やう、外記最ふ會はれぬナ　外「ハ、ハ、ハー　口には
勇ましく云ふものゝ是が玄關の見納めかと思へば奥方や當年
四才の龜丸に愛着心、猛き心は持おがら、ホロリと飜す一ト雫、續
いて振出す、白鳥毛の二本道具、前途を拂はせ御登城に相成る、殿
中無事に御勤役相濟み、津和野の御家只今以安泰に相殘りに成
るといふ、續いて岡部公の御傳記に移ります

第三席

エー龜井侯の家老田溯外記に於きましては主人能登守を諫め出仕致させました後、押と云ふ常に卑しき務めをする長羽織に太い紐、大小を挿して居ります、外記いま此押、二人を呼び手紙を渡し　外「扨みれを殿中御中の口へ持參し御當家御出入の表坊主へ差出せ……二人は其處に止まり殿中に於ての御催ほし事、或は何か椿事のとが起りし節は直ちに當屋敷へ注進に及べ……此旨心得たるか　押「ハ、ハ――委細心得ました……宜しう御座ります」と申しそれより其手紙を懷に し押、二人に於きましては殿中さして參りました、扨また外記に於きましては昨夜より主君の身の上に就き憂慮して措く能はず、能登守御登城御退出に相成りまする迄は御家の安危存亡定かに分り兼ねまするを以て自分は玄關白洲へ床几を出ださせ眉に皺寄せ思案投首ひとかたならず心配し心中には八百万の

神を祈り居ります、江戸家老用人番頭外記の樣子に釣りみまれわけは知らねと床几取りよせ左右に並んで扣へたり　外「何卒此度の事滯りなく無事に落着まするやうに」と絶えず、默禱致して居ります、然る處其日の四時少し下がりし頃押表御門内へ急いで駈け込み　押「御注進致します　外「ヤア何か事が始つたか　押「イヤナニ別に……只今殿中に於きましては御能が始まりまして御座ります　外「然うか宜しい……　押は去る後に外記心に思ふ樣　外「只今殿中に於て御能が始まるとあらば諸侯方に於かれても皆御能拜見……然らば此間に事の起る氣遣ひはあし、先づ聊か、こゝの所は心配、はあ、し」と思ひ居る、此時は上樣松の御上段へ出御諸侯方殘らず進み居並びて御能拜見……九時少々下りし時又侯　押「御注進〳〵　外「此回は何事ぞ……押「只今御能あかいり……　外記心に思ふ樣　外「みゝの處が大

事だがとそれより他の用人番頭に注意し尚も氣をつけさせます、押は又も飛び出して往く、後にて外記　外「此後事が起るか知らぬ、今にも始まるか知らぬ、何卒事が起らぬ樣……此次の注進あそ大事あり」と心の中益々信心を凝らし八百萬の神に禱つて居ります、次に第三度目またも押に於ましてはハタ〳〵表御門内へ飛込み外記の面前に來たりし時は呼吸みだれ目を白黑しながら、そこへ倒れて腰を抜かし　○「扨みそ大變の事が生じたれ……それ水を與へよ……それ藥……と背を撫り介抱し　外「氣を確にせよ下郎……前後を忘れては相成らぬぞ、注進は何事だ……何ぢや注進は……　押「ハヽハ――御注進　外「何事か注進は……　押「只今殿樣あれへ御歸り……　外「先づ宜かつた」ましてはこれを聽きホット吐く一息……　外記に於きと始めて人の顏色になりました、しばらくして　○「御歸りーと

呼ぶ、皆々御出迎へ御門はサット開き……御玄關へ御籠輿が横付……能登守御降りに相成りおもての御座敷へ御通りにあり續て外記來つて平伏す能登守今朝御登城の時外記もう其方には逢ぬぞと立派に云て御出仕然るに上野之助も討とめず只今御歸りどうも外記へ顏向もあらん赤面して御着座外記に於きましては莞爾と笑ひ、人拂ひの上兩手を支へ　外「今日の御用滯はりあく相濟み御歸館被爲遊恐悅に存じ上げます……昨夜此爺が御噺し申上升た通り上に於ては定めし吉良殿をスッカリ御突留め御本望御達し遊ばされしと存じ上げます　能「ヤア爺……妙あとを云ふお吉良を打ち果たしたならば余に於ても亦其場に於て切腹す……決て斯樣に歸館するとは相出來ぬ、外記……余は今日刄傷致さずに立歸つた　外「ヘエ……それでは其場に臨み我君には腦病風に誘れ御未練の御心が生しまし

たか……平生の御勇氣にも似合玉わせざる義で御座る」と外記
昨夜以來非常に心配せし意趣がへしに能登守を罵ります、其時
能登守　能「否余に於ては決して宋綽の心が少しも起りしにあ
らず、また臆病風に誘はれしにあらず、今日余は出仕に及び上野
の姿を見ば面を和らず彼を詐はり一刀の下に刺殺さんと奥を
うかがふ長袴上野を認めた故、余に於ては已れ上野と思ふ折り
しも上野余の顏色を見、飛下つてこれは〳〵能登殿ようあそ御
早く御出仕……今迄上野の所爲に就き御立腹の段も御座つた
で御座らう、今迄の無禮は是の通り御詫び仕る……御勤役の不
審の廉はなにくれとおく御尋下され、之よりは何事に限らず必
ず他人の上野と思召さず御家來の下記同樣萬事御問合せを下
さるやう……兎角唯今迄の無禮は上野是の如く御詫致すと昨
日に替はる今日の仕方、兩手をついて三拜九拜……けれども余

に於ては昨日迄彼が祿盜人役立たずと雜言せしを今猶胸中に
在るを以てのがし遣らじと一歩進めば彼は亦一歩後へ退かり
それは御短氣であらせらる、御家を大事と思召さむやと尙更の
追從に額を眼け昨日迄は無禮に過言今日は打て替つての此
仕打……此時其方の言も思ひ今彼を殺せば余も切腹絶非家は
斷絶……上野斯程迄に詫ぶれば堪忍して遣はさうと思ひ思ひ
し故自然余が顏色もおほりしと見に上野近く立寄り烏帽がく
づれましたと云つてゐはして與れし故思ばず添けおしと謝辭
を述べしに上野云ふ樣他人の上野と思召さず萬事御家來の外
記同樣に思召し下されと云つた……外記上野は餘程能く其方
を知つて居る樣子……夫故及傷をも致さずむざ〳〵と立ち歸
つた　外「ハヽハ――……それでおそ御家安泰……まことに恐
悅に存じ上げます、此上は何卒私へ切腹を仰せ附け下さる樣願

上まする……申譯の爲め切腹致したい儀で御座りまする能
異あとを申すあ……北方へ切腹を申し付ける落度は毫もあい
何故に切腹を致すと云ふのか、外「左様で御座ります……恐れ
入りました儀で御座ります……が今日上の御勇氣を鈍らし奉りし
は全く此外記の取計ひにありしとで御座りました……昨夜上
の御内意に據れば上はいよ〳〵今日上野之助を御討止めにな
る御勢ひ……私つく〳〵考へまするに我君斯く迄怒らせ給ふ
は汗も如何なる故を以てあるや……御家の大事に關すると故
あれある外記久しく江戸表へ出仕せる人々に鯱かに上野の人
と爲りを聞きましたに風聞に據れば上野殿は飽迄も暴慾無仁
の性質若し賄賂を贈るとの無い時は必ず殿中諸人の面前に於
て無禮を行ひ惡口を吐き辱しめると云ふと昨今聞き及びま
した儀で御座ります扨は進物の役人の不行届き……賄賂の足

らざる所より上野殿我君へ對し奉り不禮雜言に及びしかと始
めて氣が着き依つて直ちに昨夜別に上へは申上げず重役へも
相談致さず貴き御金をわたくしに御金藏より取出し紗綾、給子
羽二重、龜綾、保命酒等、其他家來にも小判にて賄賂進物、夜前外記
吉良殿へ參り中奥にての對面を容るされました……然る處賄
賂は案に違はず見込みし通り本日我君へ對せし仕うち前日に
打つて替はりしとは……アヽ身は四位の少將に進ませられ綾
羅錦繡を纏ふ所の貴き御身分でありながら心のきたなさは匹
夫下郎にも尚劣る……併しながら武藏守よりの御名家……御
勤役無事安泰にをさまりましたは此上もないとで御座ります
兎にも角にも上の御勇氣を鈍らし奉りしは此外記で御座りま
す、されば此上は外記に切腹を仰せ付け下さりませ」と始めて
明かす外記の眞心……能登守外記の手を把り推し戴きはふり

落つる涙を押へ　能「アヽ外記……扨は上野は左様ある慾心者であつたか……とは知らず全く意恨あつてのみとゝ思ひ居りし……アヽ外記の計ひあかりせば余は血氣に早まり彼に及傷に及ひ我龜井家も終に絶つ所……返す〳〵も能登の龜忽其方無かりせば今の如く相見ることも出來あかつたらう、我爲めには叔父……大叔父……何條其方へ切腹申し付けるとかは……宥して呉れよとに外記……と大層御喜びなさいました其は言葉には述べ盡されませぬ、扨こそ御沙汰がありまして外記に於きましては二百石の御加增にありました、然る處　外「私に於きましては上の御金を我儘に使ひ之で御加增を受けましては幾ら忠義の行ひとは云へ之が先例と相成りましては今後の爲めに甚だ宜しくあいと考へます、外記我儘の罪を御糺し下さらすば御家の規則が立ちませぬ」と云つて自ら三十日間の遠慮を致し此罪を詫びたと云ふあとで御座ります……今以て龜井候は殘り御小身あれども先代の殿樣より聯綿と引き續き目出度立つて居るので御座ります、實に君は船臣は水とかや申しますとが御座りますが則ちあゝで御座りませう……之は龜井候の御傳記で御座ります

第四席

扨翌元祿十三年三月本年も例年と相變らず年始の賀儀として勅使京都より東都へ御下向、相變らずの御馳走、本年亦此任に充つる役人御老中若年寄に於て御評儀、御評儀の上御撰定當年仰付けられたるは和泉國岸和田の城主、御高五萬石にてあらせる岡部美濃守義次公……此美濃守と申し上げる御方は當年御年齢五十三歳……當時諸候方の中にて三幅人と呼ばれたる其中での一人であらせられます、弓板倉に鎗内匠鐵砲岡部と云は

れるお人でおざい升即ち鐵砲を扱ふは岡部美濃守……弓箭を把つては板鉛伊賀守……實藏院流の鎗を使は淺野内匠守……何れも諸侯方には御珍らしいとで御座ります、扨岡部樣に於ては此御役を命ぜらるゝと家來の太田三郎兵衛を御呼び出しにあり　美「三郎兵衛……余は本年の天奏饗應使を命ぜられた

太「それは御苦勞樣で御座ります　美「そゐで其馳走役の間は吉良上野が御指圖役御師匠番をするのだが、彼上野の性質は其方も定めし聞いても居らうが……飽迄貪慾不仁にして若し賄賂を贈らぬと背く當り、諸侯居列びの前にて罵詈惡口、隨分苦いと云ふ評判を耳にして居る、去年は石州津和野の城主亀井が當役を勤め……其節上野の雜言不禮を怒り、若年ではあり……已に短氣に及ぶ所を家來共に賢き者があつて無事に事濟んだと云ふ風聞を聞き及んで居る、して見れば彼上野の爲には毎年三月

諸侯中一人宛、迷惑するとである本年は宰ひ余が此饗應使に撰まれし故、彼の曲つたる根情を敲き直してやらうと思ふ、故に賄賂は必ず贈つては相成らぬぞ、成るへく麁末ある物を遣はし彼に立腹さして置いて臭れ……若し此言に背き賄賂を贈りしとあらば九族を殄やすから其心得にて掛り役人に申付けろ……背いては相成らぬぞ　太「ハ、ハー……畏りました」まゐとに岡部樣の嚴しき御言葉で御座りますから三郎兵衛に於きましても此旨掛り役人に命じ口上を申含ませ岡部樣の御使者は吉良樣へ參り、申しまする樣　使「此度主人儀天奏饗應使を命ぜられ其に家の面目、身の冥加の至りで御座ります……御當家殿樣萬事御指圖御師匠番役、何卒主人身の上の儀宜しく御引き廻はしの程を願ひます……これは甚だ麁末なる物で御座りまするが御禮の印迄に御笑に入れます」と云つて岡部樣の御使者は歸

る、取次人之を持ち奥へ往き上野の前へ差出し使者の口上を申述べます、上野之を手に取り見れば年玉に下ざまにて使ふ萬歳扇子……骨は曲がり風の出ない麁末ある扇子一對と云ふて二本……上野勘解由として怒り　義「おのれ岡部奴……己の勇氣に慢じ斯程に迄此上野を蔑如にするか此度の御師匠番を頼みあるから……ヨシ〳〵明日は手の申法をそらして彼を苛め懲かして呉れん」と非常に立腹して居りまする、斯くて翌日岡部様は殿中へ御出仕御覽あさると吉良様昨日のことを腹に据へ、少しも御用の傳達をしません、そゝで御用の傳達をしまいと岡部様は旅とキチン……と若坐して上野の意表に出で御坐る、吉良様は呆氣に取られ　義「これ美濃殿……美「ハッ……　義「ゐや御身は其う坐つてばかりあらつしやるか　美「左様……相勤めます御役の方角が分かりませぬから斯くの如く若坐して居ます

義「御老中より今回の事に付き萬事分からぬとがめらば拙者へ問ひ合はさるゝやう仰せ渡されて御坐ろう……今にも御老中より何ぜそんなに着坐のみして居るかと御咎めがあつたならば何うあさる、此大切ある御役を命せられるから……斯様に若坐のみなされては仕方があいでは御坐らぬか　美「ナニ其の儀は……御老中より何ぜ斯く座つてのみあるかと云ふ御咎めがあつた節にはそれは仔細は御坐らぬ……美濃守當年五十三歳になり始めて勤める此御役……御役の容子は更に分からぬ、然るに御師匠番たる吉良殿よりは御傳達御教示は更に無之……御勝手分からざる故、斯くの如く若座してあると答へる積だ吉良様に於ては岡部様を苛めてやらうと思ひ居るに案に相違し自分が却て岡部様に遣り付けられまするものだから上野口惜がる……御用を教へぬと岡部様は酒肴〳〵として意地の悪い

とをさつしやる……交尾のあがつた女犬見たやうに何處へでも座はり込み動かず、更に立たうとはおさらぬものだから上野呆れて駭り果て　義「大名にしてはすれつからしの意地の悪い大名だ」と思ひ、これでは仕方がない今度は去年の報應、使龜井を苛めし、彼口調、例の祿盗人の悪口を用ひてやらん……之に若かじと胸に問ひ胸に應へ、今や諸侯方、幷ひに大勢の役人方が列を正し居流れて居る其中にて　義「美濃殿……足下は此大役を命ぜられながら今の中から爾うまお〳〵さつしやると今に敗答の日柄になり御用が立込んで來た時には御氣の毒なとながら貴殿は氣が逸はさつしやる……イヤサ目を眩さつしやる……考へて御覽あされ御身は是れ五萬石と云ふ食祿を戴いて御座る御方……怒るに其戴く高の御奉公の出來んのは美濃殿……取りも直さず祿盗人で御坐る」と聲張上げての悪口三昧多く

の諸侯方は今や何か事が始まりはせぬかと危む、岡部美濃守は今諸侯の中にて斯く上野に祿盗人と辱られし故ムラ〳〵……と御憤りもあされ逆上てすでに一時は斯うよと見にましたが美「イヤ〳〵今は大事の場所、寛忍すべき所だ」と莞爾御わらひあされ　美「吉良殿……御仰の通り此美濃守は祿盗人に相違御座らん、さりながら捕者不肖あれども將軍の御馬前に於て働く所の一人で御座る……仕合はせには太平に人とあつて來た其の功を顯はすの時節が御座らん、が何んだあア……祿盗人は唯だ此美濃守一人に止まらんやうだ、大名旗本大概皆んな祿盗人かと心得て居る、上野殿……御手前とても祿四千石の御高を戴いて御坐るが其高丈の御奉公は少し慾東あいようだあア、御手前迚も矢張祿盗人仲間の一人だ、して見れば祿盗人の仲間は澤山ある……御年齢甲斐もないチト言は考へたしるまれて言つし

やつたが宜しい」とあべこべに岡部様よりやりこめられましたから吉良様はハット赤面して殿中を下がり屋敷に歸つて懲いで御坐る、又吉良様の御用人粕谷平馬は岡部様から賄賂が來ない故主人に向ひ　粕「今年の御馳走役の岡部様は隨分ひどい方では御坐りませんか……龜井様のやうに少し御背めあされては如何で御坐ります……爾うあさいますれは少しは氣がつき持つて來ませう　義「ナニ今迄背めてやらなんだともあいがイヤハヤ何んと言つても岡部の奴は酒蛙〳〵として居やがる丁度糊に釘と同樣、何んとも思はない、少しも背め甲斐があい……大方家來の三郎兵衛と云ふ奴が色々と入れ智惠をしたのでわらう　粕「それではアノ例の傳の祿盜人を言つて御遣りあさいあ　義「ナニ夫も云つてやつたが却てシッペイ返しを被い乃公の方が赤面した……今年は乃公の方が癇癖が立つて頭腦がき

り〳〵する、事に依ると乃公の方から先方を及偽に及ぶかも知れん、何うか其心得で居て呉れイ　粕「それは大変……それでハ私が御金を持つて往て來ましやうか　義「待て〳〵夫程迄にも及ぶまい」　斯くて上野之助は美濃守にあべこべにやられ口惜がりつゝも仕方なく〳〵萬歳扇子一對で其年は勘め先づ此年は無事に終りました、其後一年許りを經つて一日美濃守は家來太田三郎兵衛を呼び　美「三郎兵衛……余は若年にして親父の跡を相續せしと故、通例人が隱居するよりは四五年早く世を遯れ隱居をし、倅の大助に家督を讓らうと思ふ、大助に於ても上の御用、今は乃公よりも能く勤まると思ふから……何うか隱居家督相續願を取計つて呉れイ　太「ハ、ハ――……宜しう御座ります　其りました」とそれより太田が願書を出し御隱居家督相續も相濟み、岡部大助が筑前守と名乘り、前の美濃守は青山に御中

屋敷があります、から其家に御隠居をあさり、頭を坊主にするは厭やだと云つて切り下げ髪、泰應軒と御名を改め、また太田三郎兵衛に於きましても自分の御役を悴に譲り隠居おからの隠居好きと云ふ譬への如く……自分も亦居隠居致しまして泰應軒の御世話を勤め居ります、泰應軒に於かれましては一日泰三郎兵衛……斯う御互に隠居の身になると暇で耐らんものだなァ……何か慰みごとをしたいと思ふが何が宜いか知らん

太「左様で御坐ります御慰みごとと……エー恭將棋は凝が参りまするし……徘徊、歌も御考へもの宜しくありません……御慰みごとも色々ありますから是亦術生上慰み遊ばしながら御養生に御宜しいのは御茶の湯であります

泰「ウムさうだ……それが宜からう茶の湯をやかと心得ます

太「それが宜しう御座いませう……三郎兵術御相手を仕ります

泰「乃公は曾て千家の御茶を學んだことがある、今日は此流も色々分れて違つて居るか……吉良は千家の家元だ、上野は今千家の御茶御師匠役、將軍へ御茶の湯を御教へ申して居る、余先年勅使饗應使を命ぜられし節彼は御指圖役御師匠番であつた其節の禮旁茶の湯を兼ね明日此隠宅へ彼を招待しやうと思ふ、何うか其心得にて今日使者を吉良へ遣り、此旨申遣はし置いて呉れ　太「ハ、ハ――委細畏りました、」それより三郎兵術使者に口上を申含せ、岡部様御隠居の使者は呉服橋吉良様御屋敷へと參りました

第五席

扨岡部様御隠居の使者は呉服橋吉良様御屋敷へ參り取次を乞ひ使「主人前の美濃守儀先年天奏饗應使の御役、命ぜられし其節、御當家殿様の御引き廻はしを被り有難いとて御座りました

實は其節何かと御禮致さむと存じましたが、當時左樣な儀に及びますと何んとなく賄賂めきます故、不本意ながら打捨て置きました儀で御座ります、目今では美濃守儀も隱居致し……其邊の心配も最早御座りませぬ、就きましては其節の御禮を兼茶の湯を青山の隱宅に於て明日催しします……山海の珍味を以て、饗應し奉りますれば偏へに御來臨の程を願ふたい、也、宜しく御取次を……」

取次人に於きましては奥へ往き主人へ使者の口上を申し上げますると、義夫はもの固い人で御座る、役中に禮をすれば賄賂となるから役を濟ませし後に禮をする」と云ふ心中であつたのであるか……それならば彼時能く敎へて置けば宜かつたお祿盜人と云つた體ばにもある今にあつては後悔する……大分違ふだらう……百兩も違うだらう、何に致せマア有り難いとである明日は山海の珍味も出やうし……何の道三百

兩位は出るとだらう使者に承知した旨を述べて歸へして呉れいイと云つて心竊に悅んで御座る、岡部樣の使者は歸る、扨翌朝になりますと上野淡りと飯を喰べ、先方へ往けば充分御馳走も出ると考へたからで御座ります、」義「供方共一同……今日は幾當持參には及ばんだらう多分は岡部の方から盡食が出やうからと……」と供方迄にも排當を持たせずと迄も客嗇をあさいます、扨吉良樣に於きましては御支度も十分調ひましたから御籠輿に召し青山岡部樣の御中屋敷御隱宅へと御いでにあり「上野樣御入來……」と云ふとで御門はサツト開く、吉良樣御籠輿を御降りにあり、岡部樣の御家來二十人ばかり御出迎へ、式臺に平伏す、岡部樣の御家祿御先立ち御廊下傳御案內……或御座敷一分方の杉戸をガラリと明け、たかをのより其內へ吉良樣を投り込み、戶を締め錠はピン……とふり吉良樣は幽閉を被つて

仕舞ひました、これからと云ふものは煙草盆もくれんければ茶もくれん締め置かれ切り……上野殿は此有様で不審に堪へん熟々此一間を能く見れば座敷は十二畳、天井は高く、向ふの方には牢舎のやうな格子が切つてある」義「あれは何したのか……岡部の家來乘喫煙の火を下だされ」「あい家來だあア……もし美濃殿の家來乘喫煙の火を貰はれ」「矢張默つて居る」義「是は何うしたのか……人が居ないのか知らん是岡部の家來乘湯を一杯貰はれ」と云つても寂として音もしない斯くする中段々時刻も移り最早八ッと云ふ時にありましたが未だ何にとも音沙汰がないのだらう、何をして斯く待たせるのか知らん……」噂を聞けば美濃守は千家の茶の湯に凝つて居ると云ふとである、昔太閤秀吉は千の利休を御前へ召され其時の一の話がある、秀吉已に天下が己の物となりしかば知らず識らず奢りを來たし日々美味珍膳……世の中にありとあらゆる美味は一として食し上がらぬと云ふものはない、そこで最早然うあると何を食べても旨くない、然るに利休和尚を御召になりてより……利休和尚朝御飯前に茶をたて麥の挽粉を以て御馳走をする利休椀を取下げる迄には何も差上げず、彼是八ッ時分に至りはじめて炊き冷飯を御茶漬にして御香の物を添へ差上げた秀吉之を食しあがり近頃斯樣ある味美き食事をしたとはあいされたいつしか奢が長ぜし故かと云つて大層御よろこびなふとが千家のおくじるしに記してある、美濃守は今夫を眞似る積りか知らん……アヽ腹が大分減いた、今は最う飯の菜には鹽燒きでも宜い速く食はして臭れヽば」と心の中に思つて御坐る、又供方の方に於きましてハ」△「速く畳飯を食はしてくれヽ

ばいゝに、大層遅ひあア」○「ナア應い……殿様の方へばかり馳走があつて吾々の方へは些つともねエ……殿様だつても吾々だつても同じ人間たア……人間に變はりハねエ、腹の減るのは一様である、御料理ハ何せ出でんのか知らん、御馳走の取込みで供方の方のは忘れて居るのしやアねいか……斯う食物を催促するのは不禮であるが乃公が一つ往つて脈つて來やう」と云つて吉良殿の供方に於きまして、エー吉良の供方で御坐りやすが昼食を致しませう御坐ります」△「何だ……」○「吉良の供方で御坐ります少々御願申します、エー御頭、吉良の供方だと云つて昼食を脈ひたいつしやい……エー御頭、吉良の供方だと云つて來ました何で御坐りませうか」頭「乃公が出て掛け合ふ」と云つて年齢四十許りにある顔の怖はい男が出る」頭「聽

イ……何んだつて」○「高家の家來で御坐りますが……」頭「高家の家來が何うしたつて」○「昼食を致したい儀で御坐ります」頭「ウム昼食をしたい……したいなら勝手にやつて宜しい」○「エー今朝主人の申しますには本日は此方様より昼食は出やうから辨當持參するにも及ぶまい、と申しました故此方様より頂く積りで別に辨當の用意を致しませんでした、エー今時になります迄食事を致しませんので甚だ難澁致して居ります、何うぞ御料理を頂たう御坐りますが……」頭「默れ」○「ヘエ」頭「當家に於ては、來客に飯を喰した例はない不禮の言を云と客し置ぞ」○「ヘエー……之は乱暴な屋敷たア」と吉良の供方は呆氣に取られて居ります、すると其時齢年七十許にある重役と見受けられる人が立派ある肩衣を着て通りかゝる、供方心に思ふ樣○「老人と云ふ者はすべて慈悲心の深いものである、此人に一ッ御

願ひ申して見やう……エー私共は高家吉良の供方で御座ります、今日は此方様より昼食を頂きます積りで別に弁當の用意を致しませんでした、何うか昼食を頂きたいもので御座りますが……御面倒さまながら一つ御取計ひ下さるとは出來ませんで御座りませうか　考「それは定めし難澁して御座らう、今は最うハッ半時である、今迄食べずに居あしては血氣の人は耐らん……早々掛役へ申し付けて何も無とも有り合せで料理を進ぜる筈だがあふ……」

○「ヘエヘエ……」　考「岡部の家格として料理を外客に進じた例がないでエ……先例にあいとは何うも犯すとが出來ん、餘程空腹にて耐らんあらば水でも飲みなされ」と云つて通り過ぎました

○「八を馬鹿にして居らア」と云つて當の所に來、右の言を話し各々空腹に堪へず、のゝしつて居ります、そこで據所あく供頭が立替錢をし、三人、四人と云ふ樣に替はり

あひ門前の一杯飯屋へ飛び込みやうやく腹をあしらへました、扨また上野殿は今朝より一室の中に幽閉られ一ぜん飯と云ふ怪しき所に往つて腹をあしらへるとも出來んから彌々耐らん最う此時におつては　義「岡部の家祿乘湯を一杯下だされ」と云つても聲は通らぬ程衰弱切つて御坐る、時に廊下をバタ〳〵」　泰「上野は此内に在るが……此處明けい」と云ふ聲はまさしく岡部美濃守　義「ヤレ嬉しや是れより御料理が頂けるか」と悅んで居る、其中にヒン……と錠が明き、がらりと戸が開きました　義「ヤレ吸物膳か」と回顧つて見ればとはいかに岡部泰應軒……袴におッサキ鋒巻をあし襷をかけて備前兼光の三尺の業物、刀を中段に把つて仁王立　泰「ヤア珍らしや上野……先年余が饗應使を命ぜられし節其方……諸侯、諸役人列座の中にて余に向ひ無禮雜言に及んだナ……忘れも得せぬ祿盜人と云

ひて過官……實に當時其場に於て直に討止めんと存じたるが殿中に於て白刃を揮ひ幕臣を討つは幕府に對しても恐多く、且亦此身は切腹、家名斷絶、斯樣あるとに至らば先祖へ對し不孝と存せし故、苦しき無念の胸を搗り今日迄寛忍して指いた、目今は余は是れ隱居の身……縱令其方一人を切つて捨るとも身は切腹する迄……家名斷絶には及ぶまい、サア祿盜人が尋常に勝負に及ばう」と身ありを準備し美濃守露滴るかとばかり疑はる、明光々たる鋭光の名刀、上野の鼻先きへとつき出しましたから上野魂消に失せて顏の色を失ひ　義「ワット……」と比目魚の如くに俯伏し　義「其節の上野と思召さば御腹も立ちませうが當春眼病を患みしより只今では老蓋して居ります、當時の不禮は是の如く御詫を致しまする美濃殿……何うぞ御助け下され」と顚を疊に打ちつけて兩手をつかへ涙を流して歇ります

泰「少將とも申す人が意氣地の無いあとであるは……斯樣ある卑怯の人を刀へ掛け殺すは大切な刀を濁す、上野殿……生命を助けて呉れイとあらば助けても呉れやうが……併し人と思へば寛忍があらん、人の皮着た畜生とあらば助けて歸すともあらふ、是れ人の面着た畜生と云はれても、其方は此場を逃れ歸らつしやる處存で御坐るか、返答あされ上野殿……」　義「ヘエー一命さへ御助け下さるならば畜生が望で御座ります」　泰「ハヽヽ苦々しき男かあ、あれで御役が勤まるとは……是畜生……面を上げろ、其方は犬か……虎猫か……狸爺か……狢か……顏を上げろ」　義「ヘエー禮を知らぬ犬侍で御座ります」　是に於て岡部樣は留飲がグッーと落ち美濃守心に思はるゝ樣今隱居した身とは云へ上野を殺して仕舞へは切腹は厭はないが名斷絶せぬとも限らない……あとに依ると取りかへしの附

かゐいとにあるかも知れん、今彼自らも人の面着た畜生だと云つたが此位愉快とはない……乃公が手を下し殺したよりも氣味かよい」と莞爾笑ひ　泰「アヽ長命はしたいものだ……犬を招待したは今日が始めてだ、家來共何か食物を犬に遣れ」ハット應へて太田三郎兵衛下役に命ず、下役緑の缺けたる胃鉢に飯へ鮪を交ぜ腥いのを吉良殿の眼前へ持つて來る　泰「サー喰べ喰べ、喰べあければ承知出來ん……是畜生が手を出し食事をすることがあるか、犬が食ふ樣面を突つ込め」と、上野美濃守より追まらる〳〵故仕方なく〳〵ムク〳〵として宛あがら犬が食べるやう顔を入れ喰べる眞似をして御座る　泰「三郎兵術……能く見ろ、畜生が、よろめんで喰つて居る」しばらくして　泰「これ〳〵家來共……此畜生奴を不淨門より追拂へ……」ハット應へて家來共手取り足取り上野殿を擲き出し玄關前より

來い」と云つて投り出しました、上野殿、刀脇挿を小脇に抱へ生命からく〳〵眞青になつて飛び出ました、是れより先き吉良の家來は　○「旦那は未だ歸らんのか知らん餘り御馳走を食べ過ぎると頭痛鉢卷をするがナア」と互にむだ口をきいて馬鹿咄をして居ります、斯る所へ主人の上野が裸跣で刀脇挿を小脇にかい込み顔色眞青にあり、息せき切つて來　義「家來共出立……急げ……」と云つて籠輿に飛び乘りましたから　家「ゐは容易ならんと」と狼狽て擔ぎ出し合羽は二町……槍持は三町も後れて仕舞ひました、吉良樣の御籠輿は宙をトン〳〵飛んで忽ち呉服橋の御屋敷へ　○「御歸り……」御籠輿は御玄關へ着く、皆々御出迎へ、吉良樣は籠輿より御降りにある然るに朝御湯ゴケをお邸で少し食りしのみにて終日何も食はずに御在あさるものだから腹は空り、たはひがあい、脚もとがヒヨロ〳〵御家來

の粕屋平馬が」平「御危なう入つしやいます……何うも大層の御酒で……」御坐敷へ御通りにあり直様　義「みれ腹が空つた仮々」と仮の御催促、すると平素御氣に適りのお妾が　妾「大層御馳走に御よばれ遊ばしたであらうと思ひまして御菜は何も致さずに置きました」義「何んでも宜い……香物に湯づけでも……酒を飲むと眠眩して往けんから酒は止めとしやう、何しろ速く晴立をして持つて來て呉れい」妾「御菜と云つて何もありませんがそれてはアノ妾が晝食にあしらへましたおかべの奇麗にとつて置いたのが御坐りますかそれでも食しあがりますか」義「イヤおかべ(岡部)には最う懲々……外の物で宜い」と云つて何か他の物て食しあがりました、されば此時より吉良様はおかべ則ち豆腐は御厭ひにあつたと云ふことで御坐ります、扨吉良様は岡部様より是の如くひどくあらされ、やうやく生命をお

たすかりなすつた位て御坐りますれば、これよりは己の心を省みず少しは御慾を御つゝしみにありさうなものなるに扨性質のものは止み難きものと見に此お慾は相變らず繼きまはり、終に元祿十六年、播州赤穂の城主淺野内匠守様が天奏饗應使を命せられし節、自分は又御師匠番役、内匠守様より賄賂が足らんと云ふのて悪口雑言、終に殿中松の御坐敷に於て内匠守様より刀疵を御受けあさると云ふ御話で御坐ります

第六席

エ、一は久々不快にて上野國伊加保の温泉に入浴を致して居りました處此頃漸く立ち歸りました義士銘々傳は淺野内匠頭様吉良上野様の御二人中は天奏饗應使の時分賄賂乃ち賂ひの有らざる者を宿意に致し彼の騒動を引起した様に專ら風説致し升が中

〳〵決して左樣あ譯では無い樣で有升……其前に三ヶ條程上野介殿か淺野家を御怨み成されて居る原因が有り升、物は始めが肝心だと云ふ事を能く人が云ひ升、內匠頭は父上の名を采女之正と申上て常州笠間から播州赤穗に御國替を爲すつた御方笠間には城が有つて播州赤穗には城が無い此采女殿は至つて短兵急のお人で平日口が曲り目がユラリと爲て居る、何分短氣のお方で五万三千石の諸侯が無城と云ふは情け無い事だと云つて金銀を充分にお使ひ成すつて平和の世の中に新城を築くと云ふは容易爲らん事だが遂々赤穗へ新城を御築きに成つた程の御氣質で有るが性來の癇が發を妨げたものと見にて四十五歳で病氣爲すつた、其處で御子息又一郎殿が御家督御相續相成つて內匠頭と任官を遊ばして初登城と相成る御祝內は水野大監物殿にて城中を引廻し御坐敷の樣子を段々御案內」水「是が本行の間……小役人が詰て居る是が炊火の間、是が菊の間、雁の間、扨は帝鑑の間、那方に於ては柳の間、御白書院、御黑書院、御納戶前樓下、大廣間」と詳細に段々御指南に成つて往くと柳の間の處に四五人の人々が控へて居り升水野殿其處へ參り」水「ヱヽ淺野采女殿御子息淺野內匠頭、今日は初登城、以後萬事御引廻しに預り度う御座る」と云ふに由て篤く禮義を成さる其中に桐の紋を附た年の頃五十三四と云ふ小造な臈に莞爾やかな愛きやうの有る御人が內匠頭をシロ〳〵見詰て居ましたが」老人「アヽ一親には似る者だあア先代の采女殿も癇癖が强かつたが今此內匠殿の樣子を見るに眼の工合……口の塩梅……アヽ一類氣の相號が其儘、似て居る、蓋の子は蓋だナ……」と云つた總じて人々鳥居殿をみぐつて居る下々の者は惡口雜言は別に成つて居るから氣に掛る致しませんが何爲ろ五万三千石の深空

の懐子、御手車の御介息さんで有るから蓋の子は蓋と云はれたのでグッ……と胸へ込上た」内匠「悟い癖者も有る者、諸侯を捕へて蓋とは何事ぞ己れ此儘では……イヤ〳〵今日は初登城だ且勝手も知らん事で有るから短氣を致して却て恥辱を引出て仕は成らん是りやア今日は堪へる處、」と胸を擦つて其日は御歸館に相成る堀部彌兵衛金丸御前へ出て」堀「今日の初登城滯り無く御歸邸恐悦至極に存じ升」内匠「イヤ彌兵衛、能い處へ參つた、其方に少々聞度い事が有る……五萬三千石の高を取つて居る蓋が有るか聞度い」堀「左様で御坐い升……蓋に高を下すつた話しも聞ませんが……マ、アヽ一五十三四に成る桐の紋で……五十三四で小造り、へー……其人は多だ……」堀「桐の紋を附た小造りの者は何と云ふ奴分肝入の吉良上野之介様に御座いませう」内匠「ワーン……彼

吉良と云ふ親爺は無禮の奴だ予が初めて對面を致し禮を厚く致したるに碌々禮をも致さん、且つ子が顔を見て、アヽ一親には似る者だ先代の采女殿も疳持だつたが此内匠を見るに眼の工合、口の様子が父上に能く似て居る蓋の子は蓋だと云居た……諸侯を蓋に比へるとは無禮沙汰の限り、談じた上に事に由らば打て捨やうかと思ふたが今日は初登城、萬事不案内で有るから今日は胸を撫つて立歸つた、此次出遇ひし時には摸様に由つては彼の無禮親爺は捨置難いから彌兵衛左様心得ろ……」はら〳〵と涙を落す」堀「アヽッ……困つた事だ初登城から此出來事此の主の代に珍事でも無ければ宜いが……」と彌兵衛思つた」堀「エヽ然んお事を御心に御掛あすつては成りませんそれはモー殿中御交際の御流言と思召さるゝければ成りません、度々云はれ云ひも爲升れば所謂蹴れ……徒言……左様お事を御必

に御掛あされては中々御同席御交際には成りません何卒御忘れ遊ばす樣に……」と彌兵衛頻に謝めました、其後內匠頭は御登城に成る其時樓下に於て計らずも吉良上野之介に出遇ました時に」內匠「アー予を蔑と云い居つた親爺……」と思ッてハッタと睨んだから」吉良「アヽー何だか顏に毒が有る奴、若い生意氣な奴、何うか何か有つたらば手のコッポーを知らして遣らう……」と茲に何と無く折合ん御二方の間柄、其後麻布の木下術門樣の御屋敷で御茶の會が有る、內匠頭五客の內に加り吉良樣も相客、尤も此人は仙家の御家柄で有升から……待合で種々御談話に相成ッて居る御合客は織田和泉守樣土井大炊守樣、中川修理太夫樣、斯う云ふ御顏揃ひ、吉良樣は五代將軍に「御茶の御指南を申上て御覺に目出度小姓御傍も三舍を避る程の勢ひ上野介風邪にて登城致さん時は」將軍「上野介は何う爲た」と再

三御尋ねに成る程あれば自然權柄も有る且は驕慢の生れ何卒も自慢話しが爲たい性質で」吉良「各々に珍說を御話し申さうか」三人「イヤ夫は是非伺ひ度い」吉良「然らば……抽者地行所の下野國稻葉の鄉と申す處が有が其處には千八百石の知行が御坐る、餘程以前の事で有つたと申す事だが雪の中へ親子の順禮が通り掛つた所母親の順禮が深雪の爲に持病の癪氣に閉られて打倒れて必死の苦しみ娘はヲロ〳〵涙で介抱爲ながら藥を買いに往くには此大雪で殊には夜中で案內も知れず且母親獨り捨置んければ成らんと種々心配を致したが遂々明方母親は癪氣の爲に相果た娘は母の死骸に取縋つて前後不覺と歎いて居るのを夜の明々に村の百姓が之を認め如何にも不便の娘と思つて然んるに歎くを歎いた所が生るでは無し是非に及ばん母を此村へ埋て遣らう又其方の身躰は及ばずながら成行の

立やうに爲て遣らうと何うも其娘は親獨り子獨り……母に死おれては存命へて居る甲斐が無い何卒母と一緒に死に度いと諸人の云ふ事は耳へも入れず遂々母の死骸に縋り着いて歎く事、二日二夜、遂々其儘に爲て右の處女も餓死して仕舞つたが實に珍らしき孝行者……然らば親子の死骸を離別ずに此儘にして親子の死骸を埋めて其標にと其上に小松を二本植たんですあア……」 三人「成程……」 吉良「所で年經るに從つて其松が成木爲ました」 三人「シテ見ると餘程昔しですナ」 吉良「餘程以前の事……私が此頃に至つて墓の印しを立つて置た松が倒れんと爲たスルと娘の松が倒れんと爲た母の松を支へる形狀に成つて來ました所謂一木の倒れんと爲る之を支へると云ふ樣なお譯で何か知らんが其松の姿が自然母を娘が抱て居る形狀を顯はしたのです」 三人「ヘエ……成程、怪訝ある事」 吉良「餘り不

思議の事で死んで迄孝行の心が松に顯はれると云ふのは多く得難い奇で有るから是に碑を立て遣はさうと村の人々が七八人相談を決して御地頭御領主樣へも御願へ申さうと先日拙者屋敷へ村長が右の義を申出た故に餘り感然の事で有るから然らば其碑文へ歌を吟で遣ざうから刻附たら宜からうと云うて一首致して遣はした其碑も出來上つた趣きで御座る」 中「其は宜事を成すつた世に優き思召し……定めて御名歌で御座らう願はくば拜聽致し度い者……」 二人「吉良氏何卒伺ひ度」 吉良「イヤ、モー取急ぎ甚だ不出來……御聞下さい斯樣申のです……「心有る人に見せばや下野の稻葉の里の親抱の松」 三人「成程至れり盡せり、イヤモー假名の内に遊びが無くイヤ實に恐れ入つて御座る」 と吉良樣に惜まれちやア損だから稱揚て居る内匠頭は隅の方に默然として」 内匠「どうも氣に成る羅親爺……何

か有つたら此蕣先頃の返報を爲て呉れん……」と今吉良殿の話しを目を閉て聞て御座る」士井「内匠殿唯今の御歌は能い御歌で御座らふナ」内匠「エヽ吉良殿に伺ひ升が餘事は考へて居りまして遂御話しを承り落しまして御座い升が何卒改めて御話しを願ひ度ふ存じ升」吉良「昔し親子の順禮が」内匠「それは承知致して居る歌の處が……」吉良「歌は心有る人に見せばや下野の稻葉の里の親抱の松」内匠「へー今一度……」吉良「心有る人に見せばや下野の稻葉の里の親抱きの松サ」内匠「松サと……」吉良「イヤ……ナニ、親抱の松」内匠「失禮あがら後世の不孝の者の意見の引事にも殘さうと云ふ御師しの摸樣で御座いました……心有る者あれば君に忠、親に孝、朋友に信を盡すは心得て居りさうなもの、其深く道理上に暗い者の龜鑑の引事に殘す積りで御座るなら冠の五文字を心無きと改められたら至

れり盡くせりで御座いませう、如何で御座いませう、西行法師の御歌にも「心無き身にも哀れは知られけり鴫立澤の秋の夕暮」と有るに由りて心無きと御改めが宜いかと存んじます……」外の大名は吉良樣に惜まれちやア成らんと思ふから上手を使ふが固々幇間で無いから此歌を聞て　三人「成程……それは恐れ入つた未だ内匠殿は御若年あがら詠歌は餘程高等ものと見ゆる、是れは心無きが然るべき一言」と云つて内匠樣を稱揚かから吉良樣は活と計り怒りを發し　吉良「何故内匠頭は乃公に蔭で云つて呉れん此人々の面前で此老人を辱かしめたるとは免し難い奴何ぞ有つたれば已れ内匠頭、手のコッポーを知らして呉れん……」と玄に又一つの怨を增た是れ二ヶ條目の遺恨で御座い升其處で泣面を蜂が螫すと云ふ諺にハヤ抽あい例言が有るが隨分左樣な事が

有ると見にて世間の人が能く云ひ囃し升、今一ヶ條の事は内匠頭が知らずに怨まれて御座る誠に御氣の毒の事……其譯と云ふは麹町六丁目に今非田流の道場を出して大層行はれて居る浪人で小林平八郎と云ふ者が有る此先生の生國は備後の三原の出生松平安藝守の御領分の者江戸へ出て武術を修行して當時は大先生に成つて居る、錦を故郷に飾れの諺の通り何卒安藝守殿へ御指南を爲て已れの故郷へ錦一筋の主と成つて草履取を附錦を着て往來を爲て見たいと頻に仕官の望みが有るけれども能い傳手が無いから徒らに思ひを費やして居りました或時安藝守殿の臣萩原三也と云ふ若者が小林先生へ入門を致したから平「アヽ能い捕まへ處……」たと思ふから探切に先生指南に成つて居る其内に互に心打解、懇意に成つた處で藪て仕官の望み有る事を打明けました

三「然らば貴公は主人の

生國で御坐るか、左らば折を見て貴君を御薦舉申上るで御坐らう」と三也は御機嫌の能い處を見計つて披露に及ぶと云ふと昔は國持大名が領分から出た者で有名に成つたを自慢を爲る習慣で殿中に御集りに成ると自慢を互に爲るもので御角力が領分から出て幕の内へ這入ると御城へ出て自慢を爲る武術者とても土地の者あれば安藝守何うか腕前に由つては召抱へて遣したい斯樣致せ來る十五日御本丸の退散掛に目通り申付やう其通り取計ふ樣に……」と仰せを受て三也は右の趣きを小林平八郎に通じました、平八郎勇氣を煉つて十五日を相待つて扨て十五日の晝飯を喰て●本丸へ參り平八郎御歸殿を待つている處へ御退出に相成る三也が三「小林平八郎罷り出て御坐居升」と申上る安藝「マ此儘遇う」と仰せ渡されました其處で上下で家來がズーッと綺羅星の如く控へて居る、萩原三也に

引れて小林平八郎世に優しく徐々罷り出低頭平身に及んで居る三也聊か席を進み　三「恐れあら小林平八郎儀今日御目通り仰せ付られ大慶至極に存じ奉り候」　安藝「アヽー三也苦しう無い面を上ろ」　三「先生主人の御言葉でござる面を御上あさい恐る〳〵平八郎顔を上る、色黑く鼻高く苦み走つて眉間に傷が有つて……大層に此眉間の傷は出精を妨げると云つて强く嫌ふ武藝の行みはれて居る時勢には逃て歸た傷は不可んが眉間の傷おゞ〳〵云ふものは自慢にしたもの……人物計りで二百石の價値が有るそれで腕が出來れば五百石遣つても惜く無い樣に安藝守も思召して　安藝「目通りに於て敵手を致せ立會を致せ……」と云ふ御言葉……御家來衆は皆目と目と見合ひ顔と顔を見合して　甲「何うです貴公は……巧く勝ば扶知高が增して御腰の物拜領にも成らうと云ふです、出ちやア如何」　乙「先ゝ

危きに近寄らず、頗る英雄名人の樣に存ずる主人の前で打れるは誠にはや不見聞極る慾よりは恥辱を取ん方が宜しい……」　抔と皆恐れて居る總て殿方に成ると事を命ずるに誰々に致せとは決して云はない……　殿「三太夫其方に是を命ずるから勤めろ」と云ふ事は無い若し出來ん事は昔しは頑固で有るから腹を切つて仕舞はおければ成らん甚だ開けん世の中で有るから……何某出ろ」とは決して被仰らんから誰も出る者は無い家來衆は　臣「若し名を差れては成らん……」と心配を爲て居る。と遙が向ふでは「御客アノ淺野内匠頭樣」と云ふ呼聲、内匠樣も十五日の御禮にてそれより御本家樣の御機嫌を伺はんと内匠殿は其儘御次へ御下んなすつてヒョイと見ると此始末、此時安藝殿は胸に浮んだ事が有つたと見へて内匠殿に御對面遊ばして　安「エヽ今日は麹町六丁目に町道場を開いて居る小林平

八郎、是れは今井田流の名人で御坐るが御存じ有ますか」、内匠「瑞名は聞て居る……」安「那のものの予が領分に於て出生の者、予が抱にんと思ふて本日立會を命じ腕前を試さうと思ふが試合を申付けやうと云ふ家來が風を引て一人も居らん依て勝つべき家來共が居り合んで誠に當惑爲た貴公は家來自慢で有らつしやるから御供方の内に平八郎と充分合格の試合を爲る者が有れば借用爲度いが何う云ふもんだ」内匠「アヽー夫は御易い御用、供方の内に御役に立つ者が居り合升か否や一ト通り相尋ねまして若し居合さんければ鐵砲洲の屋敷へ呼びに遣る」安「イヤ〳〵それは困る何うか居り合ふ者を召度い」内匠頭様は供頭の片岡源吾右衛門をお呼なすつて」内匠「御本家から云々の御頼みだ、何うか本家の前で有るし負ては予の恥辱にも成るが充分小林に勝を取可き者が今日供方の内に有らうかナ何うぢや

片「そりやア、モー御案じ遊ばし升お必ず立派に勝升者が御坐い升」内匠「ハアー誰じや」片「多く控て居り升第一私……」内匠「イヤ又汝の自慢には困る……そりやア貴樣には及ぶまいが最と若ひのを今日は出し度いのだやア……」片「若い處で今日居り升のは堀部安兵衛、赤垣源藏、武林唯七、大高源吾で御坐い升」相憎く又腕揃ひの淺野家の四天王が揃つて居たのが小林平八郎の運の盡……　内匠「それあれば安心……」と内匠頭殿より御本家に申上ました　安「分家の家來は予の家來も同樣で有るから早速切戸口から庭へ廻るやうに……」宛も分家の家來は倍臣にして倍臣に非ずと同じ事で有升

第七席

御庭の切戸口が開く、淺野内匠頭殿の臣は大手を振つて這入つて來ました、藝州の御家來は甲「難事を地人に讓つたから先宜

塩梅ですあア」乙「イヤ、モー御同然に悦ばしい……是れは何より見物で御座る」甲「那處へ坐つた一番先のは……」丙「彼人ア高田の馬場」甲「デップリ肥つたアノ趺へ着坐爲たのは……」丙「那人は徳利……」甲「四角い顔のは……」丙「那人はその杜若……」内匠様の御家來には一々異名が有る姓名を云はずに異名で通つて居る。高田の馬場と云ふは御断り申す迄も無いが堀部安兵衛雄常……去る元祿五年十月八日高田の馬場に於て叔父菅野六郎左衛門の爲に中津川祐範を始め外七人を斬て落した、堀部安兵衛の養子に成つた人で有るから斯云ふので有升……徳利と云ふのは赤垣源藏、二六時中、酒の氣が無ければ口も利んぞで居るが酒を飲ば強くも成る、又多辯にも成る、斯う云ふ譯で徳利と云ふ異名が有る……杜若と云ふのは竹林唯七、此人は有栖川親王家から四季咲の杜若を將軍家に進上被爲た其

花を上様から七家の國守に拜領仰せ付られた處が或日内匠殿が藪州公に御出遇の時藪「有栖川親王家から上様へ進せられた四季咲の杜若を下しふかれたるに付貴公にも弼分を進せやうから歸られたら使ひを遣さつしやるが宜」内匠「有難い申で御座る……」と内匠頭鐵砲洲の御屋敷へ歸られて内匠「是々くで有るから杜若を頂戴爲て來い」との仰せ使ひを勤める若武士は姓名の上に星が遇つて最も星の低い者が出掛る習慣で有るから無論竹林唯七、唯七馬に乘り下島に半釣臺を持せて霞ヶ關へ來て滯り無く杜若を戴いて御門を出て歸り道馬の上で考へた唯「ハテナ、此杜若は有栖川親王から上様へ進ぜられた花だ……コレ〳〵下郎待て〳〵此杜若は親王家から上様に進上に成つた尊とい花だ汝等の様な輕さ加減の知れない下郎共に持しては勿躰無い〳〵杜若……是れへ遣せ予が自分で持て往

く」下郎「何だ馬鹿〳〵しい然んなら釣竿を揃せるにやア及ばねエ……勝手に爲ろ……」と思ひながら 下郎「エ、左樣なら御持なさい……」正直一徹の竹林唯七右の杜若を馬の上で大切に捧げながら繩を繰つてトッ、トッ、トッ……と拍子に乘つて尾張町の角迄來ると 警鐘「ヂアン〳〵〳〵」市中「那火た〳〵……と云ふ騷ぎ、唯七不圖見ると向ふに煙が見える早い者で火元見はモー見て來たものと見えて那方より 火元見「ハヨー……」トッ、トッ、トッと馬を飛して來た火は何處で御座る……」火元見「左樣、鐵砲洲の淺野内匠頭屋敷」イ」トッ、トッ、トッと往つちまつた 唯「南無三、主家の大事出來に及んだ……」と逆せ上ると前後も知らず今迄大切に捧げて居た杜若を右手に取直し突然 唯「ハヨー……」と馬の尻を彼の杜若を以てピシャアッ〳〵叩いてドン〳〵乘みんで來る、火

事は畫間内匠樣の裏から燃上つた家々せから直に消て仕舞つたけれども内の火だから内匠樣も御火事裝束で玄關の表面へ坐つて若し大き〳〵成りやア燒出されて逃て行んければ成らんから仕度を爲て居る、武林は門前で馬から飛下り」唯「御屋敷出火と承り馳付ましたが早速の鎭火、恐悦至極に存じ升 内匠「イヤ唯七か些細の事で有つたが一時は騷いた何處で北方は此火事を聞た……」唯「尾張町の角で承り、直樣乘附て參りました」内匠「尾張町の角で……今に始めぬ馬術の達者早い事で有つたノー……アー何を……杜若を拜領して來たか」唯「ハヽア……何處へ遣つたッケ……馬から降る時乃公の懷中へ入た心持が爲るから……」と懷中を見ると將して有つたから 唯「サレ、有つた……」と此杜若を出して内匠樣の御前にヅーッと突附たが何爲ろ馬の尻を叩いて來た物故花は云うも更なり莖も嚙で

出した様に相成つて居る内匠殿訝しさうに」内匠「コリヤ唯七、此品は何だ……」唯「ヤ……ッ」と武林始めて心注いた　唯「ハ、ア……茫だ恐れ入まして御座い升、全く私の粗忽賞は御本家様から杜若を拝領致し大切に致して下郎には委ねませんで自身で馬上に捧げて参りました處只今申になる通り尾張町の角で出火は御當家と承知致しましたに由つて主家の一大事遣は大変と遂前後忘却仕り是なる杜若にて馬を打いて馳付ました斯く大切なる花も微塵に致しましたるは畢竟私の不束なる處、誠に申譯の次第も無之何卒相當の御處分を願ひ升……」内匠「成程……其方は實に疎忽だ……然しながら主家の大事と聞前後を忘れたと有れば何處迄も忠義の事屹と以後を慎めヨ」と御許しに成つた由ッて此人を杜若と云ふ、此武林は毎度御使者先で失策なふ事で其前の事で有つたが加賀様に御寒見舞ひの御使者に參りました五万三千石の淺野家が百万石の加賀様と交際のは其だ身分知らずの様だが御本家藝州様と御親類だから御交際申升、武林は朝劍術の道場へ出て頻りに子供を對手に代替古を爲して居る、内匠様は文武を家中で能く研かせる爲に學問所も有れば劍術柔術と何でも勝手に學べる、其上に未だ弓術鐵砲の打處まで設けて有りまして勝手に若武士が往つて指南番に就て教はる、武林唯七小供を對手に代稽古を爲て居る處へ神崎與五郎が來て　與「此奴一つ子供を敵手に爲たつて藏は昇ねエ、教へて遣らう」　唯七、斯んあ郎……乃公が貴様を敵へる」　與「マ、何うでも宜、一本參らう……今日は三本勝負、二本勝、一本負」　唯「何だ、不禮千万な……サア來い」と竹劍を持て立上る　與「イヤ〳〵然う怒つたつて不可ん」　唯「イヤ〳〵然う怒つたつて不可ん」　與「ハ、ア……茫だ恐れ入まして御座い升、全く私の粗忽賞は御本家様から杜若を拝領致し大切に致して下郎には委ねませんで自身で馬上に捧げて参りました處只今申になる通り尾張町の角で出火は御當家と承知致しましたに由つて主家の一大事遣は大変と遂前後忘却仕り是なる杜若にて馬を打いて馳付ました斯く大切なる花も微塵に致しましたるは畢竟私の不束なる處、誠に申譯の次第も無之何卒相當の御處分を願ひ升……」内匠「成程……其方は實に疎忽だ……然しながら主家の大事と聞前後を忘れたと有れば何處迄も忠義の事屹と以後を慎めヨ」と御許しに成つた由ッて此人を杜若と云ふ、此武林は毎度御使者先で失策なふ事で其前の事で有つたが加賀様に御寒見舞ひの御使者に參りました五万三千石の淺野家が百万石の加賀様と交際のは其だ身分知らずの様だが御本家藝州様と御親類だから御交際申升、武林は朝劍術の道場へ出て頻りに子供を對手に代替古を爲して居る、内匠様は文武を家中で能く研かせる爲に學問所も有れば劍術柔術と何でも勝手に學べる、其上に未だ弓術鐵砲の打處まで設けて有りまして勝手に若武士が往つて指南番に就て教はる、武林唯七小供を對手に代稽古を爲て居る處へ神崎與五郎が來て　與「此奴一つ子供を敵手に爲たつて藏は昇ねエ、教へて遣らう……」　唯七、斯んあ郎……乃公が貴様を敵へる」　與「マ、何うでも宜、一本參らう……今日は三本勝負、二本勝、一本負」　唯「何だ、不禮千万な……サア來い」と竹劍を持て立上る　與「イヤ〳〵然う怒つたつて不可ん」　唯「イヤ〳〵然う怒つたつて不可ん」と云ふものは怒つたらば出來んもので遊々神崎に二本

勝を取られたから武林は非常に残念がり　唯「モー一本……」
弾「イヤ〳〵モー御免だ」　唯「然んな事を云はんで……今度は三本勝負三本勝で……」と頻に迫つて居る處へ　使「武林氏御用で御座る、御前で召します」　唯「御前で御用だ……何爲ろ二本負て甚だ氣分が悪い、御召と有れば詮方が無い」と御前へ出てる　未だグズ〳〵云つて居る　内匠「唯七、加州へ寒中見舞の使者を申付る」　唯「ハテナ、神崎の奴に二本負た三本目の小手へ這入ッたのは何う爲て這入つたか知らん……へゝ、委細承知仕りました」　何を承知爲たんだか上の空、途中ながら　唯「二本目の小手は早かつたナ……ヒョイッと來る奴をヒョイッと際けたら何時の間にか小手を打れた」　下郎「だから此人の供は何時でも厥だつて云ふんだ、馬の上で劍術ウ遣ッてらア詮方が無エ人間だ」　唯七は考へあがら往く内加賀様の屋敷を通過ぎた　下郎「其方へ往つちやア追分の方……」　唯「加賀様は知つてる」　下郎「知つてるあらば通り過ぎちやア不可ません」　御遣物は赤穂は錦の宜い處だから毎年御寒見舞は錦を持て參る……　唯七は案内を頼んでそれへ綿を並べて居る　加臣「ユレは〳〵御使者遠路御苦勞様……」　唯「エゝ淺野内匠頭家來武林唯七」　○「當家の取次役篠原鎌太郎と申す者」　此時に至て武林は劍術の考へで何の御使者を云ひ付つて來たか口上を忘れちまつた　唯「内匠頭の使者武林唯七」　篠「當家の家來篠原鎌太郎」　武林幾ら考へても跡が出ないから口繋ぎに　唯「エゝ御姓名を……」　篠「ハゝア此人は耳が遠いな」と思つたから少し大きな聲で　篠「篠原鎌太郎……」　唯「宜う御座い升……」と云つて何だか譯が分ら無い鎌太郎と云ふ人が考いたか愚鈍くて口上を忘れたんだ……失敬あがら寒中の御使者で

御座るか……」唯「ハヽー成程然うだつた」とは思つたが唯「今頁左様で御座ると云ふは忌々しい何か云ひ拔けを爲やう」と四邊を見ると正面の處に立て居る銜立に猩々が御盃を小脇に抱込んで柄杓を右の手で持て猩々舞の立派な御銜立此品へ目が注たから」唯「イヤ來る廿五日四座の猿樂を招待致し能興行を仕るに就て何卒御見物願ひ度宜しう御取次を願ひ升」と述た篠原呆氣に取れて此事を加賀様の太主へ申上る」加賀「何うも小身の内匠頭は大膽性質だ此數へ日に能興行とは大したものだ、何か徒然の折からで有るからして往つて遊山を爲う」と仰せを蒙つて鎌太郎出來たり」鎌「委細承知仕りました當日は必ず拜見に參るで御座らう」唯「へヽー……サア大變今度は到底眼を切らんければ成らん……」と驚き切つて歸て來て唯「サア今日も失策くあいました……」内匠「又何か爲損じたか

何う云ふ失策だ……」唯「實は使者の口上を忘れました」内匠「痴呆た奴だ」唯「先方で寒中の使者かと云はれて左様で御座いか升と云ふのは殘念で御座い升から能興行を廿五日に催はすから御越を願ひ度いと申たら御越遊ばずとの御答へで御座い升から……」内匠様は黙いて」内匠呆れた奴だ……然し其方は見處が有る先方で斯うかと云つた時左様で御座ると云へばソレ迄の人間だ能興行が有るとは小量の者に云へる言語で無い今一度は驚して遣る以後を氣を注けろ」と能師へ懇合つて是非に及ばんから能を催し藝州加州を始め交際の諸侯を呼んで莫の金で大散財を致した、内匠様も武林には酷い目に何度も遇ひました閑話休題皆内匠様の御家來は皆切戸口から這入つて來ました」内匠「アヽー敵手は誰に爲たもんだらう……勝は誰でも宜しいが敵は腕が出來て居るに由り之は何でも好い劍術

で無ければ成らん愈々危なければ合打で喘ぎす樣な者……ヲ……源吾〳〵」源「ハヽー……」内匠「聚々噂も聞て居る北方敵手を致せ何卒充分に……勝つ氣では不可ん負ん樣に愈々不可んけりやア合打と云ふ樣な事にして……」源「委細承知致しました……」源「恐れながら有名の小林は大高源吾では覺束ない斯く申す唯七へ何卒命ぜられたく存じ升」内匠「固まつた數だ……唯七其方は相撲が好しやと申すが……」唯「角力は大好物……」内匠「角力は能い者が先へ出て取る者かペイ〳〵が跡で取るものか……」唯「そりやアモー番附にも乘せん者が一番に取ましてそれから上の口上の二段それより三段目二段目幕下、幕の中、關取と相成ますと閉塲升」内匠「劍術も其通り一番弱い者から三段目二段目と出てそれから幕の内それから大關と云う可き其方が一番跡で爲るんだ弱い者から先へ出るのが

順だ……」唯「エヽ成る程……然んあら宜しい三段目早く出て負ろ……」殿樣の口先で欺れて仕舞ふ人間……小林平八郎も一生懸命、巧く往けば一段に出精、先づ眞劍勝負も同じ事、大高源吾も本家の御前當家に係る事だから之又一生懸命で有る両方とも素面、素小手、大切で御座るから小手頭へ布を幾回にも卷て打れても眩暈の致さん樣に致しました全躰竹刀を取り是を被りまして打れ升のは擦つたと云ふ彼りやア如何も實に分らん戰ひの折からに眞劍でかすつたと云へば傷が着て居る又道具を着て勝負を爲る時道具の無い處を打ば道具外れと云ふが是等は勝負には成らん眞の勝負は少し劍られても勝負は付く欲に此試合は眞劍と同じ事で有升却説小林、大高の兩人は中央へ身仕度に及んで」双方「御手柔かに……」と云ふ聲で合圖に」双方「ハッ……」と左右に立分れて是から討合に成る、總て已れ

を守つて敵手を斬る氣に成る者です五分の立合に成る下手の者を大抵の者が敵へるには頭を打れても切られぬ用心を爲て向ふを斬ると云ふ中々急に勝負の着くものでは無い……各々片唾を飲で見て居と小林平八郎」平「ヤア〳〵ッ……」ポン〳〵〳〵と烈しく竹劔の頭から右左と刻んで打て來る其美事なる事電雷の如く之が爲に源吾は目が暈んで跡へタッ〳〵〳〵と卷立られて退つて來る實に是れ危き處」唯「サア三段目の源吾が負りやア二段目の乃公が出るんだ……」堀部はクス〳〵笑つて居る」堀「跡はモー出る事は出來ねエ、一番勝負だ源吾が負ても勘討は出來ねエ」唯「それでも御前が……」堀「イヽヤ御前は貴公を御斯しなすつた」唯「然なら源吾は五万三千石の家來の代りか、源吾を引戻して乃公が出る」此時源吾は退りあがらヒシーリ打返した奴を小林が切返して又ポン〳〵〳〵と刻ん

で來る實に美事に刻んで來た源吾は打込む事出來ず己れの用心計り爲て居るので既に追立られて御堀際まで退つたから最早跡へ退る處が無い武林は堪らあくおつたから小林先生の傍へ進み耳許に於て天地に轟く大音で」唯「危ない……」と怒鳴た其大音が今迄一心凝つてた小林の腦へ感じたと見に」平「アッ……」と驚く機會に惡奸い源吾たから」源「御小手ヱ」と小手をポンと輕く打た打上た奴で木刀を不圖と上げて」源「御小手ヱ……」と打た打れたに逃い無から小林は」小「參た……」源「甚だ失敬……紛れ勝、何卒御忘れ下さる樣に……」平「イヤ恐れ入……つた唯今拙者の耳元で突然に大聲を御立あすつたは誰方で有升」唯「拙者〳〵……」平「此勝負は充分に勝を得る處を思はん者の爲に不愍を取つたは歎はしい……」唯「先生御負かヤレ〳〵御氣の毒、先生の切返し幻々妙々言語の能く及ぶ處

に非ず、思はず機會で出た一言、今井田流は失禮あがら不便の御流名と存ずる山中抔の閑靜の處ろで有れば勝を得る今井田流が承り度い戰場では物の用に立んものか承知爲度い彷らの森の中からして伏勢百人一時に躍り出した時には今井田流の太刀先は亂れて働き得ざるの今井田流か麥畑から不意に鐵鉋を口先揃へて打出した時は防戰の出來ぬ今井田流か……扨大毅の腹消化劍術、戰場には用便成らぬ流義とは片腹痛い事で御坐る……」と武林は大口開て」唯「ハッ、ハッ、ハッ、……」と笑つた武林の掛へ事には逆ひ無いけれども相憎小林は不辨の人で有るから唯七の不理屈でも之を說破ッて答辨を爲る事が出て來ん藝州公小林をヲロリと見て考へた」藝「源吾よりは遙腕は達者だが縱令分家の家來の過ちでも負た者を抱へては何うも肩身が狹家來は幾らも有る者だから……」と拜領物で御抱の

御沙汰止み小林平八郎は口惜涙を拂つて空しく月日を送る內後年米澤公上杉樣へ抱へられたそこで吉良樣が御緣者で有るから段々と吉良樣を懇ろに成りましたから或時は吉良樣の御前に出で四方山の御話を爲る此人固より武藝者に似合ん如才無い人だから上野之助の氣に入る、遂に彼の淺野家を怨むの一件を話した吉良樣も二六時中、內匠頭を憎み稍とも爲ると御話しかも出るから其他に就ても小林平八郎は內匠樣を吉良樣に種々讒言に及び愈々上野之介、內匠樣を憎んで」上野「時機とそ有れ……」と時節を待て居りました處情無くも實に元祿十四年三月十四日松の間に於ての騷動に相成と云ふ御話し

第八席

エヽ大家の掛に優れんと爲るや必ず先づ種々前兆の有る可きものと見て元祿十三年十二月大晦日の夜は殊の外なる大雪

で有りまして淺野内匠頭様は御表に御寢りに相ある處が既に前々回に申上ました如く性來癖の强き御氣質雪降る音の窓に當るが何分癖に躓れて如何にも寢就ぬに由り燈臺の燈火を搔立つて歌書を取出し頻に古歌を讀で自分と遊上を靜め眠氣の差を待て居ると時しも傍の庭の方に於てメリ〳〵と殊の外ある物音が致す内匠頭御枕刀劍を御取りあすつて身がまへを遊され猶音爲る方へ心を注て伺つて御居で被成と最早音は絶て致さん」　内「是ヨ誰來い……」　○「ハッ……」と其席へ出て參りました」　内「アヽー三人程予と共に一人は雪洞を持ち二人は御附添申る樣に」　多「畏りました」と一人は雪洞を點て參して殿樣の御歩行あさる儘に庭際まで來ると」　内「其雨戸を一枚開け」　臣「ハッ……」と雨戸を明る」　内「其邊へ……」と雪洞を出す」　内「只今此邊で怪敷物音が致したから其方等を起

したのだ」　雪洞を差付て兎見斯見伺ふと云ふと雨戸の外の處に風好く篠竹が植て有る其木へ降積る雪の重で保ち難く一本の竹の折た物音内匠樣は」　内「アヽー雪折竹で有つたか是で能い〳〵」　と御寢所へ這入られました凡そ木の折て柳の枝に雪折は無しと云ふが柳は内に勇が有つて外面は軟弱物だ然れば雪を能防ぐ竹と云ふ物は外面も勇内も强い物で有るから却て雪に折れる人間迚も其通り内心に勇を含んで外面は優柔く見ねばありません者で然れば仕官人抔も其如く何の役に昇進爲やうと心に勇を含んで勉强を致し物に屈せず外面には優を備へて上に仕へ下を憐む時は必す名を顯し家を起す事も出來安らかに一生を送る事が出來升もので有升が内心も勇外面も勇で有つたあれば」「アヽー乃公は何役に昇級爲やう」と望みを起すは宜しいが容易に昇進が出來ん時に或は道ならぬ事を

致し己れの職に居る事も出來ん樣に成まする商人迚も其の如く同町内に同商賣が出來た時に」商「彼と出來る丈は競つて愈々不可あければ腕力に訴へても彼を倒そう」抔と云ふ考へ起しては遂には其町内に居る事も出來あい樣な事に相成ます「專ら豪專ら强あれば國を失ひ家を滅す」と軍書にも有る通り内匠頭樣も若し柳の心が有つたあれば五萬三千石を棒に振て仕舞れも爲升まいと思ひ升……内匠頭樣も安心成すッて御休みなされたが、程無く明七ッの鐘を告た此内匠樣が御目を覺して筆を御採遊ばして御丹じやくへ「閨近き園の扉の竹折て夢驚かす曉の雪」と御吟あすつた明れば元祿十四年一月の元旦御家來が恭悅を申上げに御目通りを致す」内「アヽ拜見を賜ひ升」と取上げ見るが見て呉れる樣に……」甲「エヽ今朝歌を一つ吟だと」甲「閨近き園の扉の竹折て夢驚す曉の雪……餘り面白く無

い御歌だ」と思つたが」甲「アヽ如何も御名歌の樣に見上げ升……御先に拜見を」と次の家來が見て」乙「成程是は御名吟で結搆で御座り升」の七人の者が」一同「御名歌御秀逸……」と御賞申して居る處へ大高源吾が遲れて御目通りを致しました此大高は和學者で俳諧發句を能く爲る人然れば歌の手爾波も心得て居り升から其御歌を拜見を致し」源「是は元旦の御歌では御座らん發句俳諧を作る方は心得ねば成りませんもの閨近き園の扉の竹折てと云ふ手爾波が能く有ません元旦に折てと云ふ言葉は用ひ度有りません又下の句に夢驚かす……驚すは元朝に用ひ度く無い樣に思ひ升是は火中遊ばす方が宜しう御座いませう」内「成程」と内匠頭御心注きに成つて直と火中を爲て御仕舞成すつたが此年が是勅使饗應の命を拜して吉良殿の邪見を怒られまして三月十四日殿中松の間に於て御刃傷

に及んで即日芝愛宕下の田村樣へ御預けに相成る即ち是か竹折てと云ふ處へ通つて居る樣に思ふ又食祿も所領も上られて進退拙引に敗亡を致した四十七人の家來の身の上に及んだのは乃ち夢驚すと云ふ所に符合致して居る樣子然らば元旦抔の歌や發句は必爲て吟あければ成りません閑話休題一月も最早中旬に相成りました近々の内に勅使御下向に成る最も此の今年の勅使は例年より手重に扱はあければありません其譯如何とあれは今回の勅使は五代將軍の御母公桂少院殿が一位に御進成つたので女官に一位と云ふは中々に容易成らん位で澤山有りません其位を持て下る御勅使だから扱ひを粗ろに櫻應を致されば成りません其處で當年の御馳走役は淺野内匠頭樣、伊達左京之助樣の兩人命せられた此伊達と云ふ大名は宇和島の伊達遠江守の分れて三万石を食み八町堀の屋敷に住つて代々伊

達若狹守と申し升が此時は若狹と云ふ名の老中若年老に有ッテ名が差合つて左京と致した者と見へ升左京之助八町堀の屋敷へ歸つて御居なすつて家老荻原彌五郎を召て」左京「今日の御召は勅使御馳走役を命せられた左樣心得なす樣」彌「それは御大役で御座い升」左「御役中は高家の肝入吉良上野之介が御師匠番で有るワ」彌「番頭くは是より御供揃ひを遊ばして御自身に吉良殿の屋敷へ御來駕にるつて御面會の上斯く〳〵の役を仰せ付つたから何分御頼申すとうかと存じ升」左「イヤ道理だ予が往つて頼んで來やう」と直ぐ殿樣だから又御供揃ひ……八町堀から呉服橋内の吉良上野樣の屋敷へ參りました門番が門「御客ア〳〵伊達左京助樣」程無く吉良樣御立出に成つたから左京助櫻應を厚く遊ばして左「此度天奏櫻應使を命ぜられ

ました家の譽此上も無之何卒御引廻し下し置れ升様に宜しう總ての事に御口達を願ひ上る又相役淺野内匠頭は大身抽者は小身故君や差遣も有らうかと云ふ御心配も御座りませうが抽者一い手で勤役成難き時は本家守和島の遠江守相談を致し其に て不可時は大本家陸奥守と相談致し升るに由り何卒御腹藏無く御傳達願い度う御座い升」 吉「イヤ其は何より恐悦で御座る何か勅使御馳走役と申すと六ケ敷様に思ふがイヤ勤め様で左程費も掛らん其邊は上野が手練て居るから遠慮無く御傳達申すで御座らう必ずとも御心配には及んと」 左京助「殿々くと頼んで屋敷へ御歸りに成ると直様吉良様へ使者に進物を持して遣つたる表は干菓子一折餅菓子一折其實中には百兩包が三ツ」 吉「アヽー左京殿は怜利人だ相役淺野内匠頭は種々重なる遺恨も有れば此度の賄賂受納の模様に由つて積り積りし鬱恐を晴し

して呉れにやア成られェが……イヤ平馬内匠頭使は未だ來んか」 臣「未だ參りません」 吉「未だか……」 臣「今に見にません」 吉「未だ見ぬんか」 と吉良殿は首を長くして待つて御居あさる御話し變ッて淺野内匠頭様は御城から鐵砲洲の上屋敷へ御退出に相成る瓦解の時分に中川修理太夫殿の居られた家が舊内匠頭の屋敷で此家へ御歸りに成ると家老が 家老「今日の御召は……」 内「天奏饗應使を命ぜられた左様心得升やうに」 家老「ヘヽア其は御大役で御座い升」 是を聞て居た用人見習の堀部安兵衛武常ヒョッコり首を上て 安「イヤ其は御心配のもので御座い升……御勤役中は高家の肝煎吉良殿が御師匠番とは固つた吉良殿我君とは誠に御情交が悪いイテ不都合の事で有る……願くば此度の義に付き吉良家へ賄賂と爲して五百両も内々御送り有つて然る可きかと存じ升」 是を聞て居た家老が 家」

ア、一是々堀都迂闊な事を御勤め申しては成らん凡そ金圓は下の者に遣るは至當だが上に立可き者に金圓を送るは失敬だ吉良殿も四千二百石の旗本でも四位の少々高官の貴人だ其人へ送つたら必ず御立腹が有らう迂闊な事を申しては成らん」

安「ア、一家老等二人は揃ひも揃つて固つた人物……思ひ切つて袖の下を送る可き處だ」と思つたが其頭の習慣と爲て用人見習は己の腹に落ん事が有つても云ひ通す事は出來んから堀部は其儘控へて居る　宗「然らば左京家へ御問合せ有つては如何のもの」一同「成程問合せて見やう」大名では留守居役と云ふ者が有つて淺野家の留守居役から伊達家の留守居役へ淺野御當家から吉良殿へ如何云ふ御進物を差上たか伺ひ度」伊留「當方から吉良殿へ送りましたは餅菓子一折干菓子一折で御座る」と答へて金圓を送つたと云ふ事は秘して申しません淺野

家の使者が歸つて斯くと申升ると　宗「ソレ見さつしやい」安兵衛心の内で　安「縱令伊達樣から送らんでも此處は遣つて宜處だが……」外に詮方も無く默して居りました　内「然らば餅菓子干菓子へ充分念を入て遣つたが宜らう」と此品を吉良殿へ送りました此時堀部の言葉を用ひて五百兩送つたあれば如何に吉良殿が遺恨が有らうが金圓故には解易い殘念ある哉千兩に足らざる五百兩の爲に大家の淺野家を滅亡に及ばせるとは、ア、一役人の善惡に依つて主人に大いある損得の有るもので有ます却説此方は吉良樣の御用人粕谷平馬吉良樣の御前へ出て　平「淺野内匠頭樣御使者此者此品を持參致して參りました」吉「オヽ爲うか……」平「使者は歸りまして御座い升」吉「ウヽ是は左京殿よりは菓子折が大きい樣に思ふが餘程念も入つてる樣に思ふ……」彌「御當藥の通りで御座い升」吉「仲味は金圓も

幾分か伊達よりは多からう、サ改めて見ろ」平馬折の蓋を開て見ると固より入ぬ金圓たから出可き筈は無い　平「金圓は御座いません」吉「無い筈は無い能く心を注けて見ろ」平「見ましても御座いません　吉「ハテナ……アヽア嘘を聞ば内匠頭は念の入つた男だと云ふから餅菓子の餡の中に包んで有るから餡の中を調べて見ろ」平「馬餅菓子を二ッに割て　平「へヽ餡は青小豆で御座る」吉「餡は如何でも宜」平「有ると存じたらあんに相違は如何……」吉「アヽー是痴呆め干菓子の庭が厚い様だが二重蓋に成つて居るかも知れん切破つて見ろ」平「ヘエ……」と小刀を抜て干菓子の庭を切破るとハゼと云ふ味の無い菓子がヒョイ〳〵飛出す計り」平「ハゼ不思議抔は何ふ云ふもんで……」吉「イヤ痴呆な事を云ふあ……」平「愈々御座いません」と聞て此時上野助勅諭と爲て御立腹　吉「已れヤレ内匠頭不敵

千万ある譴責を旗本と思ふて斯の如き致し方は何事ぞ宜此度の彼の役に就ては彼奴の身上の半分は必ず摺して呉やう……」と腹を立ては堪りません吉良殿翌日から御登城に成つて左京殿には　吉「アヽ爲て斯う爲て……」と御傳達が有るが内匠頭へは少しも御口達御座らん内匠様ア少とも分らねエから聞くと　吉「今は御用多だから何れ後刻……」とか何とか云つて袖を拂つて奥へ這入り姿を更に御見せあさらん又時と爲ては吉良殿は内匠頭の傍へ來り諸役人の前をも憚らず存外ある悪口雑言を爲るから何分つらくつらく當らつしやるか或は麻布の木下で茶の會の時に上野殿の歌に非を打た事が有る其歌の遺恨で斯くつらく當らつしやるのか……家來等に聞したら嘸心配を致すで有らう」と自分の胸で何事も堪へ〳〵て勤めて御居あさると三月十日と相

成りましたモー十一日は勅使御登城是から御馳走が始まると云ふ手續きで有るから内匠頭は早見藤左衛門を以て　藤「明日の御料理御献立を承り度う御座る」と申入れた處上野介の答へ升るには　吉「明日は花山院はう御の御日柄故精進料理を以て饗應奉るに由り其手配に爲て宜しかろう」と云はれ歸つて來て内匠頭様に申上る何事を爲るにも皆御家來が致して内匠殿も左京殿も唯眞の勤めるは勅使の前だけで有升から家來一同精進はアヽ爲て斯る爲てと頻に働らいて居る處へ大高源吾が出て來て是を見て　源「是りやア可笑い苟くも征夷大將軍が初めて御使に御馳走を遊ばすのに精進料理とは可笑ふ事だ是りやア御差圖が違つて居る家の被仰る事に差圖違ひは有るまい」　安「井彦右衛門　彦「イヤ高に成つて精進では無い魚類だと成つたら如何で有ります」と

大高は聞ぬ氣象だから誰でも聞ます突掛つて來るから自然大聲も出て遂に内匠様の御耳に這入る様に成つて參りました御聞爲つた内匠様は　内「結局我身の爲を思つて爭ひ吳れるのを有るから就れも就ども分離い此度の御役に就ては金銀の費は厭はん唯モー勤の上に過りが無ければ宜いのだから精進料理と魚類と両様に手當を爲る然う用意爲て置たるならば手落は有るまいから左様致すやう……」　安「それおれは間違は無いが片々は必ず無駄に成るやうな物大金の掛る御料理を片々無駄と成るは實に浪費……」　萬「事吉良殿へ賄賂を送つた方が宜つた……」　扨翌日伊達、淺野の兩公は勅使の御昇殿前に出頭致して時刻を相待て居られると　吉「御料理御内見」と云つて吉良上野介様正面の處より中桂を手に携へ威風凛々と爲て這入つて御坐る　左「是は吳服橋様御早き御登城」　吉「イヤ左京殿御早い

御登城好い天氣で御座る」内「吉殿御早い御登城」上野介空そぶいて　吉「アイ……」伊達様が左京殿は油紙を取って段々に御献立を御見せ申すを一々打見せ上野介が　吉「アヽー美事〳〵御美華か結搆出來ました充分充分貴君の器用に反して傍の武士はイヤモー困り切る敎へて〳〵呑込み惡く唯殿中でマゴ〳〵爲て他から見たら師匠番の不行屆きかと耻かしう御坐る……アヽー御立派な事……」内「御料理御内見に預り度う内匠頭も御席を御進み遊ばして」内「御料理御内見に預り度う御坐い升」と一々御献立を披露被爲吉良殿ヲロリと見て」吉「内匠殿是りや何だ油を以て製した献立……是りや精進では御坐らんか御用に成らん御役御免進退を伺がはつしやい」内「へ……昨日家臣を以て今日の御料理御献立を貴君へ御問合し申せし處精進料理との御口達故斯の如く用意致して御坐い升」吉「イヤ〳〵左様な傳達を爲た覺には無い如何にも御身の家臣が今日の料理を聞合せに參つたから上野介の差圖は御身は客嗇の生れ儉約者だ客か男故今日の御料理に粗末が有つては相成んと心得し故明日の御料理は精物料理と敎へて遣つたに家臣の落度……只今とあつては家來の不都合を申立つも詮方が無い進退を何ばつしやい……」内「へエ……然れば魚類なれば相勤りませうか」吉「魚類あれば勤るは知れた事斯樣な品々は不吉で有るワイ」と足を上てハッタと蹴返しました内匠頭苦笑を遊して」内「イヤ家來共控への料理を此處へ〳〵……」内匠「ハッ……」と持運びしは一際目立つ魚類の献立て前に並べて内匠頭刀劍の柄へ手を掛て」内「吉良殿是でも勤役成るまいか」と膝突掛る」吉「イヤ……是あ……是で……ハッ……勤る

が何故貴公は御料理を二通り手配を致された……」丙「是は浅野の家風で御坐る何事も御用向に二通り手當致すは藪州の家風で御坐る」吉「ハヽヽッ……扨妙な家風も有るもの斯の如く無駄な費用を掛ずとも其金圓を幾らも遣ひ道が有りそうあるもの……」内匠殿未だ御用は口元だぞヨ今から此舉途附やうでは今に御用が立込んで來やうなれは氣の毒あがら貴殿は、氣絶を爲るか目を廻し兼ぬ其有様……斯んな役に立ざる者が五万三千石とは高い御腹立めさるあ是でも五万三千石柳の間詰の諸侯とは請取兼る人間だ哩……アッハッハッ……」と席を蹴立て奥殿に道入り行く」内「吾が面前に於て祿盗人と云はぬ許りの今の悪口、モー堪忍も是まであり彼を斬て我身も共に……」と刀劍の柄へ手を掛てアハヤ大事と見た左京助御袖を押へて引戻し御意見を申上げたに由つて無念心骨に徹したる内匠殿も

左京助の扱ひに由つて其日は是非無く御歸り遊ばす三月十四日は如何ある悪日ぞ堪へた内匠頭の堪忍袋の緒が切れたと云ふ殿中騒擾の御話し

第九席

因縁と云ふ物は有るものか爲て浅野内匠頭様御臺所は珠て愛岩下高年山清松寺ある事は諸君御存じの事で有りませう御切腹の後小々茲に仔細出來て御死骸を清松寺で受取ん事に成た處内匠様に付き添て居た竹田定右衛門と云ふ者が別懇に交つて居る高輪の盤松山泉岳寺の住職酬山上人を頼んで那の通り内匠頭の御遺骸を那の寺へ納めました吉良様の御墓臺所と云ふのは牛込の築土泉岳山盤松院と云ふ當今以て立派な寺……内匠頭の御寺は盤松山泉岳寺、吉良様の御寺は泉岳山盤松院と云ふ寺の多い御府内に寺號と山號を反對に持て來た様に符合

て居ると云ふのも不可思議……人は死して名を殘すと云ふ諺ざが有るが惡名は殘し易く芳名は殘し難い事で有りまして當今以て赤穂浪人の石碑有志の者も參詣を爲て傍ら內匠頭の御墓へも御香花を獻る者も有る如何お物好の人でも今日は吉良樣の石碑へ參つて來た」と云ふのを聞た言は有りません軍談師は職掌で有るから覺にて置ねば御話しが出來んから牛込築土の盤松院へ往つて度々は拜見は爲ませんが一度實は往つて見たが五万三千石の食祿だけに四十七士は云ふも更あり內匠頭樣の石塔も立派な物だが如何も今往つて見ると吉良樣の印は御存知の通り聊か眞の目印計り吉良樣の家は四千二百石が滅亡ても上杉彈正の太夫と云ふ立派な親しい親類も有るからモー少し何とか墓標の立派なのを殘しさうな物だと要ざる御世話だが聞て見ると」答「イエ私共も可笑な事だが確かには知

らんが最初は隨分立派に石碑が立たのだが如何云ふ譯だか立派に出來ると其石碑が毀れ〳〵爲て如何も不可ん度々斯う損じると云ふのも不審な事だが今度は何卒金錢の費用には關はんから毀れん樣に石の工匠へ申付て立たが宜だらうと御相談の晩に吉良樣が上杉樣の夢枕らに御立被爲て彈正殿種々御心配で俺の石碑を御苦勞被下由だか何卒俺の願ひには目印計り の置土を殘して貰ひ度い夢心に上杉樣、何爲父、上は然んなに遠慮被爲……立派な御印しを殘さうでは御座いませんかと問ると イヤ〳〵モー拙者は大石に言を傳へ承る」と申しました何は兎も有れ惡名は殘す者では御座いません……前回に申上て置いた通り元祿十四年三月十一日明日內匠頭樣は御登城の折の御召が分らん如何云ふ御服裝御出仕被爲て宜しいか速見藤左衛門を以て吉良家へ」藤「明

日の登城服は如何なる服で御座るか御口達に預かり度う御座る……」吉良様の御答へに」吉良「明日は大紋、烏帽子で出仕致されて宜しからう……」藤左衛門立歸て内匠頭様に申上る」

内匠「然らば其通り手當を爲ろ……」と十二日の朝に成ると御納戸役から大紋烏帽子を奥へ廻す是を今召て御登城に成らうと云ふ處へ大高源吾唯雄遣しく馳て參り」大「お早う御座い升恐れあがら吉良様の御傳達其意を得ません事が御座い升から唯今相役伊達左京允の御出仕を外乍ら拜見致て居ました處今日は長上下で御座い升大紋烏帽子では御服遣に相成て居升」

内匠頭様　内匠「ハヽー然うか……併し御匠番吉良殿の差圖を私に控へるも無禮、予は是ありでを爲て參らう……」と内匠頭様は其ありで御駕籠へ召て御手箱へ長上下、御提物九鐔の御脇差、其品丈を御手當被爲て御登城

に成て下馬から御降被爲て袖を爲て百人番所の前へ御掛りに成ると番人が此躰を見て　甲「ヤ是りやア大紋が出て來た那りやア誰だらう……」　乙「大名に逢へ無へが如何お紋が附て居る」　甲「丸に遊ひ鷹の羽が附て居らア、濃州島だ……」　乙「アヽ那りやア何だ播州の内匠様だ」　甲「赤穂の内匠頭か……」　乙「アヽ然うだ」　甲「何が御役でも仆て居るのか」　乙「ウン……天奏應擬使……ヤレ〳〵氣の毒な事五万三千石の家來の内に少しやア目鼻の明た者が有りさうなもんぢやア無へか今日大紋で出仕爲たら乱心と云ふ事に成て差圖へ閉門だらう……アヽー何卒内々で知らせて上度いが線無き衆上は度し難しと氣の毒な事だなアー」と云つて靴を隔て痒きをかく面持ちで居る此方は内匠頭様、御坐敷へ出て御覽被爲と整然と爲て麻上下　内匠「ハッ……」と赤面被爲と御大名には公義の表坊主が其々極つて居

る申す迄も無いが徳川様の御城内の御座敷は御大名でも家来が一人も随行とが出來ん僅々一人で御歩き被爲のだから御用多の時國主育ちで困るから其時には出入の表坊主を呼て命令する……今浅野様の御出入表坊主は此躰を見て膽を潰して横つ飛に飛て來て坊主「鐵砲洲様、大紋では今日は御服が違つて居り升」内匠「ゝヤ着替は用意爲て有る、何卒目立ん様に取計らつて呉れヨ」坊主「左様あれば此方へ御出を……」と云ふ内匠頭様は柳の間へ御請被爲ば宜が休息爲た御座敷は柳の間へ御帯を締直さうと云ふ休息所が無い柳の間で着物を着替る譯にも不可ん表坊主は其處は殿中は鵜の様に明るいから内匠頭を御連申して御腰の物奉行の部屋を借て大紋を脱せ烏帽子を取らして麻上下長袴御提物、丸髷の御脇差を御差替ん成て内匠「是おら仔細い無からう」と云ふ譯に成て柳の間へ御立出に成

つて皆さんへ御挨拶が濟だが濟ぬは内匠頭が心の内例の癖がサリ〳〵起つて殘念で成らん、御話し變て吉良上野介様吉良「昨日内匠頭へ服途ひの差圖を致し置たる故今日は大紋烏帽子で居るは必定……彼を充分辱かしめて御役御面差控へを爲せた上積る意恨を晴して呉れやう……」と驕慢の鼻高々と立出に成て内匠頭の姿をジロリッ……尻目に懸ると道は抑も如何に　吉良「フヤ……」と吉良様も目算が外れた……左京允席を進み　左「是は〳〵呉服橋様、ゑ早い御出仕、快晴で御坐い升る」吉「是は左京殿、好い天氣で御坐る」内匠頭も無念だが禮は禮だから聊か席を進み　内匠「是は〳〵吉良殿、御早い御登城」上野介そら嘯いて　吉「フーイ……」不禮千万ある挨拶、内頭様は此機を捨ず機嫌を直せば好いが其處は大名育ちで所謂苦勞を爲ない御子息だから直と胸に有る思想を吉良様へ訴へる様な事

だから折合が就ん樣に成つて來る　内匠「吉良殿へ伺ひ升昨日家臣速水藤左衛門を以て今日の着服を伺ひましたる處大紋烏帽子との事然るに本日は長上下……過にし頃の御料理の手違ひと云ひ又今日の御服違ひの御傳達と申し、何か内匠頭……御意に召ん事も御坐らば三拜爲て御詫を致す是よりは順道の御指南を偏へに御願ひ申上升」　上野介此言を聞き　吉「是は内匠殿、異な事を被仰る、何が怨みが御坐らうぞ縱令怨が有れば迎師、匠番の此方が傳達に相違を指南爲る樣な小量の上野と思はつしやるか如何にも昨日速水藤左衛門とやらが今日の着服を問合せに參つた故上野介の差圖致したは明日は大紋烏帽子……では無い長上下ぢや、然し間違んから宜、では無いか」　内匠「イヤ〳〵是れば家來大高源吾と申す者が心添呉れましたから間違はずに相濟ませました」　吉「ハヽー……其ぢやア何か貴

殿はナニか今度の御用に就ては高事其源吾と云ふ者に聞合して御勤めが能い……」　内匠「左樣で御坐い升」　吉「ハー其リヤア忠誠家來を持しつた然らば貴殿は師匠番は要ぬ男、成れば手柄に勤めて御見やれ月鄕雲客の式作法を小身大名の倍臣奴等が知り覗す可き筈は無い萬一式作法を悉しく辨へ居る者あれば忍びの術でも行ふ曲者かも知れん哩……内匠殿未だ御用は端緒だぞヨ今から此キヨト付樣では今に御用が複雜だら貴殿は氣絕を爲つしやるだらう……イヤ那のキヨト付顏は……」　と上野介が　吉「ハヽヽ……」　と云ふ高笑ひ、壁蹴立て奥の座敷の方へ參られるのを内匠頭、堪へ〳〵し無念の涙　内匠「又して も祿盜人と云はぬ計の今の一言、モー勘辨も是まで成り家にも身にも換へ難い……」　と脇差の柄へ手を懸てアハヤ珍事と見たる處へ那方の方より「アイヤ内匠頭殿、暫く〳〵……」　急が

すば。濡ましものを旅人の。跡より。晴る。野路の村雨。……と太田道灌の古歌を高らかに吟じ「先々御止まり有れ内匠殿……」と後より烈しく呼懸る者が有る、是探幽齋守政が画いたる猩々の御衝立の處で有り升、内匠頭殿何人成んと忙しき中にも回顧つて見れば加藤遠江守様と云つて伊豫國大津に於て六万石を領し内匠頭様の叔父様に當つて居る方　内匠「ヤ、是は叔父君で御坐いましたか……」遠江「イヤ内匠殿嘸おつらからう、拙者も思ひ出せば六年跡、此の天奏饗應使を命ぜられた處御役持に一人心に稱わん痴者有つて今日は斬て捨てやうか今日はモー許されんと思ひし事は度々で有つたがイヤ〳〵殿中、及情は此身の切腹、家名斷絶、先祖へ濟ん家來が不憫と堪へ〳〵て勤め終つた今年は別段あらん貴殿の大役、若や御短氣でも有りは爲まいかと思へば如何も捨置難い、此程拙者も風邪に罹り屋敷に藥用手

當を致して居る故に御暇御免の届けを出し強て出席爲た加藤遠州……及ばず乍ら影身に添て様子を伺つて居た處耳に這入つた吉良の無禮惡口、定めておつらからう其處が堪忍、堪忍は美麗な者で、人は却つて賞るとも笑ひは爲ん、ツッと御堪い下さい堪忍の妙藥を御傳授を爲やう、家來不憫家名大切と云ふ事を思召るが堪忍に好い妙藥で御坐る……イヤ恰度拙者が持て居る此扇面で例を引ば御自分様は扇の要、骨と地紙は貴殿様の御家來、幾万人が貴殿一人が有れば社妻子を養ひ長上を養ふ此扇子は要が丈夫に保てばこそ扇子の用は爲すあれも要が取れは骨がバラ〳〵、貴殿が一人亡なれば家來の者は路頭に迷ふ家來不憫が堪忍のよい妙藥で御坐る及ばず乍ら御分りに成らん御用向は遠江へ御問合せ被爲サ今日もモー御用濟だらう唯今拙者も退出御同伴致そう御同伴有れ……と加藤老人が心静かなる

意見、内匠頭」　内匠「ハッ……叔父君の御言葉短かの御意見、五臓六腑に染みまして有難く承わりました、仰せに從ひ御同伴仕りませう……」　全躰十二日に今茲で及ばに成る可き處だが加藤様が御出遊ばして別條も無く此日は騒動にも成らず御二人並んで御退出、大手の處まで御出被爲と加藤様の御供方はズッと正しく殿様の御退りを待て居たが内匠様の御供方は未だ駕籠も持て來ない御供頭が　供頭御退りだ御乘物は如何爲た上が御出に成た御駕籠を……」と云ふ供頭の命令で漸々其處へ駕籠を擔いで來る有様だから鎗も向ふにも有れば此方に一本を立て有つたが漸々皆揃ひ升る、内匠頭は駕籠に乘て屋敷へ御歸り遊ばして御供頭は片岡源吾右衛門で有り升から源吾を呼寄て　内匠「予が退出の時に大分供方が不行儀に散亂て居つたが那りゃア何ぞ有つたのか……」　源「エヽ恐れ乍ら御耳へ入れ

まいと心得ましたが、御目障りの上は申上升實は暗嘩を致しました、御供待を致して居り升と奥平様の御供方が參りまして御當家の鎗を頻に撫て居り升たが淺野の鎗は食物が不足から臧に鎗が貧相だ疲て居る當家のは鎗も澤山に喰扶が附て居るから福々く敗肥滿で居ると申ましたから鎗が物を喰やわ爲めへし肥滿て居るも衰て居るも有る物かと一言二言爭ふ内遂々掴みあいに成りました處へ竹林が飛出しまして片つ端から面倒だ切拂つて仕舞へと既に大事に成らうと云ふ處を奥平の御供頭と私と取鎮めました中途上の御退出……恰ど好い物分れに成りまして御座い升御尋ね故據ろなく申上升」　御聞被爲た内匠頭、御面色サッと變り　内匠「アヽ源吾右衛門、無念々々一生半生の下郎ですら主辱めらるゝ時は主の辱を雪んと爲て其身を忘るゝに予は五万三千石柳の間の諸侯で有りながら憎しと思ふ其

奴の頭へ手を上げ乗る我身の上……源吾右衛門推了爲ヨ……」源「其御怒りが有らんかと其故控へて居りましたので御座り升……」内匠「イヤ〳〵是りや眞の座興た心配致すな、サ、休息至せ……」源「惡い御座興で御座い升、然らば御機嫌克う……」と云つて源吾は其儘下つて仕舞ふ其夜内匠頭は御表へ御辭りに成ると書間吉良様に責られるのが身に染みて痛に觸つて、逆上して來て如何も氣相が烈しく成つて冷汗が出て寢付れん内匠頭起上つて燈臺の燈火を振立て歌の書を御取出に成つて其書を讀で逆上を頻りに靜めて眼氣の差すのを待つて被居るとハタリ〳〵と御寢間へ忍んで來る足音が致すから枕刀を取寄て身がまへを爲し樣子を伺つて御居で被爲と襖へ手が觸るとスーッ……と唐紙が開た見ると暗い處から三十計りの武士が悠然這入つて來る　内匠「是々其へ參つたは誰ぢや……」武士「み

れは御目覺で御座い升、恐れ入ます、神崎與五郎に御座い升

第十席

御意に入りの與五郎と御聞被爲て御刀を元の刀掛へをかけあすつて」内匠「ハヽー與五郎か夜中何等の用事が有つて吾寢間へ來た……」與「エヽ恐れ乍ら書間は御傍に横目付、傍目付が多く控へて居られ升故夜中に能り出でましたは與五郎奴が一つの御願ひが御座い升御聞濟を願ひ上度う存じ升申上惡い事では御座い升が私へ何卒御暇を下し置れ升樣に……」内匠「ナニ暇を與れ……」與「ハイ……」内匠「如何云ふ事で……」與イエ其仔細を申上げましては御暇は出升まいと思ひ升から仔細を御尋ね無く御暇狀さへ下し置れ升れば其譯は後々で御了解に成升、平に御暇狀を頂戴致し度う存じ升……」内匠「其りや與五郎如何も予には遣れん」與「そりや又如何云ふ譯で……」内匠「

只今其方の願ひ通り暇狀を書て遣はして安井彦右衛門や藤井又右衛門に聞れた時は予は仔細は知らんが當人が暇狀を與れと申したから遣したと申しては家老共が承知は爲まい仔細を云へ道理の事あれば直樣渡す……」與「イエ其義を委しく申上たら御暇狀は出ぬまいソレが如何にも私は殘念で御座い升」

内匠「ハヽー了解た……予は小身故勤て居つても出世も長い大藩に能い在付が有るから其家へ仕官を爲やうと云ふのか、其方の忠義を心に爲んでは無いが加增を遣はす時節が未だ無い然う云ふ事ゐら辛抱致して勤よ時機を見て增高を取するで有らう……」與「イヤ其言は御前御情け無い御言葉……頂戴致す百五十石の食祿さへも勿躰無いと思ふのに何で祿不足を抱いて居りませうぞ慨歎しい御言葉で御座い升モー斯う成れば浮暇を願ふ主意を御話しを致しませんければ成りませんが物語り

を致しました上は理を非に曲ても御暇狀は頂戴致し度う御座い升……此度御前樣饗應使の御役にて何時でも御退出の時分見上升と如何も御血色が御惡う御座い升御醫者方に聞合せ升れば御脈に變りは無いとの事、若や何ぞ御心配ゐ事が有るかと堀部安兵衛杯が何と無く伺ひ升とイヤ〳〵別に差たる心配は無けれども身不肖故大役を引受たるにて自然と元氣も衰へ血色も滄醒るのだらうとの仰せ……とは云ふ物の猶疑はしく御本丸の表坊主へ内々で手を廻して聞合して見升ると吉良上野が重ある雜言、過言、惡口を承知致しました、扨は御顏の色の御惡いのも夫から起因つた事が、遂には上も勘辨成らず若や大事に至らば御家に係る一大事……如かず御暇を頂戴爲て、御暇狀を懷中に及び、下郎匹夫と委を變へ吉良殿の退出を待て踊り掛つて怒鬼傍の武士を打拂ひ吉良殿の首を貫ひ其場を去らず切腹

致せば縦令跡で悔いても、無祿の浪人と相成り、御當家へ上から御咎めは御座い升まい然らば御勤役充分で有うと思ひ升……思極めた御話しを申した上からは理を非に曲ても御暇願は是非頂戴仕り升……」赤心面に充れたる與五郎の物語り內匠頭は無念の涙を流して是を御聞遊ばして神崎の掌を取つて押戴ださ　內匠「アヽー與五郎過分成る其意、家來とは思はん肉身分し兄弟と思ふ、それ程までに予の爲を思ひ與れる……其心配から其方の身命を貰ふに及ばん今日殿中で加藤遠江守殿が意見を承り決して何も意に介せん積りて二人と有る可き者で無い最早內匠頭の心は鐵石の如く此後上野が如何に罵り惡口云はう其例へ泥塗を以て彼に擲れやうとも必ず勘忍致す決して短氣は仕らん斯程の事で誠忠の汝の一命を貰ふにも及ばん、此の事が世間に露顯ては予の恥辱……決して

短氣は致さんから退り呉れヨ」與「アヽー有難い御言葉に御座い升然らば此後殿中に於て御短氣の御振舞有之る時は臣一統君を奉怨つり升」內匠「アヽー怨めしモー予は蹴みにじられても短氣致さん……」との御言葉に與五郎は安心して御座敷を退つて仕舞ひました……何と內匠樣には大した家來が有つたもの內匠樣が利發お方だから御暇狀を御遣なさる神崎は勿論出來る人物だから打り捨で御暇狀を御渡し被爲んが若し馬鹿殿樣だと茲で御暇狀を御遣なさる神崎は勿論出來る人物だから打り捨ねません時の大老井伊樣の勢力も三月三日の雪の日位か水戸の浪人の爲に大切お一命を終つた後の事だが四千二百石の吉良樣だから共も澤山御連被爲んでホーヽと遣つて來る處へ赤合羽に饅頭笠か何か被つて旅本の仲間の樣な姿に變じて大手の下馬に隱れて居る處へ吉良樣の駕籠が來ると饅頭笠ヲポンと投て赤合羽をはね落して下は覺悟の白綿襟、跨の股立高

く取て居ると云ふ拵へで言葉も懇す吉良様の駕籠傍の者へ斬て懸る　一同「其リヤ、狼藉者だ……ワッ……」と云つて御駕籠を放り出してパラ〳〵〳〵ッと逃て仕舞ふ駕籠から吉良様が吉「不禮者奴……」と出やうと爲る處を一太刀　吉「ワッ……」と云つて御倒れ被爲處を乘懸つて差殺して直様自分は腹ア切て死で仕舞ふと内匠様の御身上には仔細は無かつたか知れんか、講釋師、淨瑠理劇場は如何も大變な災難……赤穗記はソレで滅茶〳〵に成て仕舞ふ内匠様は御暇狀を御出し被爲ない計りで是から刄傷、切腹、城渡し、親子分袖旦敵討……十八ケ條申聞き……長く成て講釋屋の米櫃に成たのは内匠様の御かげで有るかと思ふ閑話休題モー短氣は致さんと御決心の十四日如何なる悪日成るか四ッ半時殿・中大廊下に於て其期忍袋が破れ吉良殿へ實光の名刀を持て踊懸と云殿中刀傷の騒動に愈々相成升

第十一席

エヽ元祿十四年三月十四日愈々天奏饗應の當日なれば諸侯、諸役人總出仕と云ふ御當日にして天奏饗應使淺野内匠頭様相役伊達左京之助様も御登城に相成る程無く吉良上野助様も御師匠番の事なれば四位の少將の官服を纏ふて登城に相成りました、伊達左京助様を御呼被爲て」吉良「扨左京殿、今日は殊の外御大切る御日拵、島渡過失が御座つても家名に關る一大事、由て御用御傳達申すで御座ろう」左京「ハヽッ有難き儀倖で御座い升」其處に淺野内匠頭も御着座に成て居るから兩公を集て云々〳〵と御傳達に成つたら輕便で有らうに左京助を次の間に呼寄て耳に口寄呼いて御傳達を被爲て居る」左「エヽ……成程……エヽ……御道理様で……有難う存ずる……吉「宜しいか若又何と無く心に落ん事が有らば何遍でも高家部屋へ御越有れ

御口達申すで有らうから……」傍の武士は」武士「内匠殿は氣の毒な者で御座る」と思ふ内吉良殿は立て奥殿へ御越に成る内匠殿も默しては居られんから」内匠「アヽ吉良殿へ御願ひ申升、内匠頭へも今日の御用御傳達に預り度御座る……」吉「イヤ、内匠頭殿、唯今は御多用で御座るに由て貴殿には後刻御口達致すで御座らう」と奥へ這入つて御仕舞被爲……左京助殿は此御用を御片附被爲其用が濟ば又此方へ御居で被爲て御用に御掛ん被爲御勸めの順々誠に宜しいが内匠様は御用を勤めたくつても様子が分らず唯相役だから左京助の爲る事を見真似を爲し立働いて御出被爲から何分擧動が騷がしう御座い升から御老中御頭、佐渡守様から御用部屋の御坊主を以て内匠殿へ」佐渡守「何故頻動て御出被爲、御心を落付て勤役被爲やう敕使方に無禮が有つては相成らんから……」と一本責られたから御

癖の強い内匠殿だから愈々殘念で堪らん爲ると四ッ半時御老中方から敕使掛りの役人衆へ心得の御書付を御月番から御師匠番吉良上野助へ御下に相成ました上野其書を懷中に入れて柳の間へ徐々出て御覽被爲と、大澤右京少輔、六角越前守の御両人、淺野内匠頭、伊達左京助、是は大名柳の間持受の人で御用の中央だから雜談を爲て居る處へ來つた上野助」吉良「アヽー御一同、閣老方から心得の御書付をお下に成つた、サ拜見爲さい」と大澤右京大輔へ御渡し被爲たから大澤は之を見て」右京「御先へ……」と會釋を被爲て右京太輔は是を次の越前守へ渡す越前拜見を爲て其次席の内匠頭へ渡さうと爲ると吉良殿が」吉良「アー左京殿へ……」左京殿へ……」と云ふ差圖據無く淺野様を一人置て左京殿へ渡す左京助拜見を爲て相役の内匠頭が未だ見ずに居るから」左京「御先へ拜見……」と渡さんと爲る

と這は如何に」吉良「左京殿、此方い〳〵……」と云つて書付を取上て仕舞つた」吉良「何と御一同御服し被爲たか……此内が一ッ欠れば家斷絶、家名に係る一大事、能々注意召——……」三名有難く拜見致しました」吉良「どりや御傍御用を達で有う……と徐々立て又菊の間へ御出被爲、内匠頭心配で成んから」内匠「イヤ吉良殿へ内匠頭願ひ上升……掛り役で御坐れば拙者の名も坐つて居りませう、拜見を願上升」吉良「イヤ拜見稱ん」内匠「其りや又如何ある譯で……」吉良「アヽー貴殿は才物だ、師匠番は要ぬ御人……此御書物決して拜見相稱はん、コレ内匠殿十二日に何と御云やつた此度の大役は家臣大高源吾に聞合して勤役致すと立派に云はれた覺が有らう、小大名の倍臣奴等が九重雲深き殿上人の禮、格式を辨へ居らう筈は無い豈夫辨へ居るならば恐びの術でも行ふ痴者かも、知ん哩、ワハヽヽヽ」と高笑

ひズッ〳〵ッと裝束の長袴を捌いて奥へ御出被爲、内匠頭殿は頼んでも書付を見せても呉れず」内匠「心得ずば家に係わるだろう如何爲たものか……」と思はず知らず膝で吉良様の後へ尾て歩いて御出被爲、吉良殿は回顧て内匠様が口惜さうな様子を見て」吉良「フヽン……」又回顧ては」吉良「フヽン……」と鼻で笑ひ急ぎも爲ずに徐々と御越に成ると此處に羽目の間と云ふ少さい部屋が有升此處に御盛様御用人梶川與三兵衛と云ふ者が居る處まで參りました是用事が有つて若年老の差圖を待て居られる處でヤッタッ出會ました梶川も上野助と平常交際が深いから」吉良「イヤ、梶川……」梶川「コレハ〳〵呉服橋様に暫く……」吉良「イヤ打絶て御目に掛らん」梶川「貴公様も何時も御壯健で……本日はお目出度御坐升……」吉良「アイ當日は悦恐で御坐る、イヤ御老中方から心得の御書物を御下に成

た、サヽ拜見被爲」今申す通り御臺樣御用人で勅使の方へ關係の無い者で有るから此書付は無用の品で有升、與三兵衛是を拽いて拔いて見る、聊も此書付と云ふは左のみ內匠樣が見度がらなくても宜かつた礫々ん御書物と申しては恐れ入るが例年全じ文句で出る所謂版にでも起した樣な極つて居る御書付で殿中非常を大切に爲ろと書て有る是りやァ心得ずとも落度には成らん樣で如何も大白痴でも御城の內へ火を振散て歩く者は有りませんが人の心は可笑な者で礫々ん手紙でも書面でも見せびらかして大切さうに扱傳はれると見度もので」吉良「與三兵衛大切な御書付だから大切には違ひないから」梶川「是りやア御大切な御書付、折よく拜見有難う存ずる、御返却仕る……」吉良「イヤ、寫に御大切の御書付、トリヤ參らうか……」梶川「御免を……」又

書付を懷中に爲たありでノソッ〳〵つと御座つたのは探幽齋守政が畫た松の極彩色の御衝立の有る松の間、又松の廊下と申て御疊樓下……其中央迄吉良殿が御出で遊ばすと跡からスカ〳〵ッと早足に內匠樣が御出被爲て吉良殿の裝束の袂を控へて」內匠「吉良殿其書付是非拜見を致さう……其內が一ッ欠れば家斷絕家名に係はる一大事、拜見稱はん其內は此御袖を放ち升まへ」吉良「拜見稱はん、何故止る、御用多の予が身躰、御差閊へに相成る、無禮者、其處放せ……放せ、放さんか、此無禮者奴が』と立て居ながら持て居た中啓でヒシーリ風を切つ打降した、吉良樣は內匠頭の手を拂ふ積りで有つたらうか立身で打降して來た中啓だから袂を押へてゐ座つた內匠頭の御頭をしたゝかに流れて來たつた中啓がヒシャァリ……」內匠「ハッ……」と內匠頭御逆上、產れて三十七年、如何ある我儘を被仰つても幼少

の内から御頭へ手を上げた事の無い諸侯育ち頭を打れる非機に被つて御座つた冠が居去てッ、つと取て烏帽子の紐がフラリと下つた内匠頭怒り心頭に徹し刀の柄へ手を掛る上野介是を知るや知らずや回顧り」吉良「アッハッハッ……」此時内匠頭左文字の柄へ手を掛居しが扨手も見せず吉良殿目懸」内匠「黙れ」と斬込で御座つた……赤穂記を書た書籍も種々有るが皆又偽の折内匠様が左右の御袖を切て御捨遊ばして邪魔に成らん様に覺悟被爲て斬付た越き書て有るが裝束の袖を拾る程の暇が有れば吉良殿へ一刀で療治の出來ん様に斬て仕舞ふが嘸と一時の怒りに前後を忘れて斬付たのを有升から充分遂られぬかつたと云ふのが本説らしい……却説名刀て有るから烏帽子が左右にハッと斬て仕舞つたけれども此烏帽子に三宅近江の鍊冷た金輪入左文字が遮ぎられて仕舞つたが御引被

爲時に小額に摩擦て傷を附けましたが汐時と見にて血汐は漲然と流れ出しました固より吉良殿は口は悟いが膽の小細お方て有るから血汐のしたゝるを見ると大きに仰頭爲て」吉良「ヤー各々御出合下さい内匠様が亂心致した」と頓つ轉の逃て行く」内匠「己れ逃して成る者か」と一心不亂に追ふて行く此物音を聞付たは羽目の間に座眠を爲て居た梶川與三兵衛、何事あると覗いて見ると内匠は明光々たる一刀を提げ追て行く先に立て逃て行く吉良殿を見れば道は如何に血汐に染て居たるに疑て行うと爲る内匠頭が裝束の永を兩の手で確然押へた、永の裾を後から押へられては堪りません内匠頭躓いてどうと前に御倒れ被爲を得たりと與三兵衛おひかぶさり」梶川「御短氣有つては成りません、白刃を御收め被爲、御場所柄で御座る」内匠

イヤ誰殿かは存せんが御場所は覺悟の上、武士の情じや見逃してヨ……」と被仰るのを聞ずに上から押へ付る其内に」甲「ソレ喧嘩ヨ」「刄傷だ……」と御徒士目付御小人御屈從御番、御書院、御番、表坊主、御徒士頭、御用番頭、其々表役人が」一同「ソッ〳〵……」と集つて來る」内匠「モー不可ん……」是御思召て徳川の旗本に怪我を爲ては濟んから人の居あい方へハッと刀を御あげ被爲たが松の廊下の四本目の御柱へ切懸つて左文字が止つてブラ〳〵提つて其跡に傷が痕て居つて其柱を内匠柱……焼て御譜請が出來ても御坊主衆が」坊主「此邊で有つた」と其處へ跡から内匠柱の跡繼が出來ると云ふのも可笑い、却説吉良殿は頻に傷を押へて高家部屋に逃來る折しも播州龍野の城主脇坂淡路守……同國大名と云ふ者は交情の悪いのが多いが龍野と赤穂とは恐しく交際が深い」脇坂「ナニ内匠頭が刄傷を致

した……其は大事」と駈付て來る途中芙蓉の間の處で出合頭に」吉良「内匠頭狂氣で御座る、各々御出合下さい……」と云ふ聲聞て脇坂は四邊を見廻せば折宜く更に人影も無し」脇坂「此親爺が存命中は何に就ても諸侯大名の難澁……内匠頭も此親爺が卑劣の心から此度の大珍事を引起したるに相違無い、僥倖四邊に人も無し」と突然拳を堅め彈力を附けて吉良殿の横面を……逃て來る時は足が浮て居るから」吉良「キャッ……」とよろめく内にだた〳〵逃出した悪い戯事は出來ないもんで吉良様の血が裝束にベットリ附て是では如何も御能拜見にも列座ませんから」脇坂「坊主……坊主」と表坊主を呼で」脇坂「急病差起り眩暈甚だしきに付左様御届けを爲ろ……」と御城を急怪病で脇坂様は御退出に相成まして御屋敷へ歸り」脇坂「此裝束は高家の親爺が血の附たんだ子孫の語り艸にも成らうか

ら土蔵の隅へ仕舞つて置け」と被仰て未だ華族の脇坂様に有るさうで御座い升が弘法大師の血附と逸つて博覧會にも出せん様子、御説五代將軍様は吉良殿を古今の御最食の爲に強く御心配遊ばして」將軍「早く療治手當を爲て遣れ……」と云ふ仰せ故早速黒崎と云ふ醫者が當番弟子を連て充分仕度を爲て參りました、此黒崎と云ふ人の子孫は唯今八丁堀の邊に居る様で有り升……段々吉良様の血を洗ひ調べて見るとホンの摩擦傷丈所かすがひ膏薬でる宜位だから醫者も少氣抜の様子を」黒崎「是は大した事は御座いません醫者の手で無くとも宜いので島渡と爲た膏薬で快愉り升」と云ふを如何聞たか間違で」吉良「是は療治は屆かんか……」と云つたッと大聲揚て御泣被爲たが其傷は廿日計りで快愉りましたが右の横面が膨立つて是は百日程疾だと申升がッラ見ると談路守の拳の方が痛かつたか

も知れん、扨顧れ幸願は梶川與三兵衛、内匠頭を鳥渡と押へ附た計りて即日老中若年寄より五百石の加增を申付られ與三兵衛意氣揚々と爲て退出掛に梶川が御加增御禮廻りに歩く西の丸下御老中土屋相模守の使者が其處へ來て」使「エヽ梶川様唯今殿中から旦那の書面、御多繁でも有らうが御待合を願つて與と云ふ事、モー退出に間も御座るまい御迷惑でも御座いませうが御待合を願ひ升」梶川「委細承知致しました、御案内を……」大した御座敷へ通させる、火鉢、煙草盆、御茶、御菓子抔ぞが出て斯う云ふ御方が入替り立替り出て御酒は未だ下さらん與三兵衛」梶川「何で土屋様は拙者を御呼被爲たんだらう聞は御武勇お殿様だと云ふ事だから今日の大事件を話せと被仰るのだらう若し其事あれば乃公あればこそ吉良殿を救けたが凡人ならば既に大騒動に至る處で有つたと大きく御語しを爲やう……此土

屋の殿様に取入る時は是から御役替の三ッや四ッは出來やう
豫而若年からの宿望成る長崎奉行は何の易の遂には國主大名
とは成られ共下に〳〵の聲諸共登場爲るかも知れぬ哩」と山
氣の有る與三兵衛が心に待て居と程無く」○「御屈出ッ……」
と云ふ聲で土屋様が躍つて御出あさる

第十一席

土屋「アヽー與三兵衛は來て居るか」○「ハイ先程より御待で御
坐り升」相摸「ヲヽ然うか彼も今日は結構で知己、親類を呼で今
宵は酒宴でも爲るので有らう、早く面會て遣はさう……」與三
兵衛相摸守を見て抵頭平身」相摸「アヽー與三兵衛か、其方が參
つたら開う〳〵と存じて居つたが外の事で無い那の床の間に
在る掛軸……相摸には一向分らんが其方に頼んだら分らうと
思ふから苦しう無い那方へ進んで畜說を爲て與れ、進ら……」

梶川「へエー……土屋の殿様に分らんものは畜だか畜だか知れ
んが乃公が見ては分りさうも無いものだ……が何は然し拙見
爲て見やう」と暫く頓首爲て御床の間へ進で両手を突て面を
揚ると極彩色の軸にて三國一の富士の山が畜いて有つて貴い
御人が籠籠の水干を召て金の烏帽子を被り馬に乘て鞭を生
して後から朱の妻折を差掛居る、剛い人は猪の上に乘て短刀を
振上て居る、鹿、兎の類を一方に集めたる有り或は側竹を持て居
る民四方に散乱爲……向ふには陣屋と見にて數十流の白旗を
立て有る獸物から人物を細畜に凡そ五千餘種も畜て有る浮世
畜師に頼んだら高金を取る事で有りませう併風韻が無い、御座
敷には向の悪い値程踏ない俗の掛物」梶川「此掛物から一目に
知れさうな物だ、併し土屋の殿様が分らんと云ふものは如何ふ
る事か」と心に怪みながら」梶川「乍憚ら右幕下源頼朝公が富

士の御狩かと存じ升」相摸「如何にも佐殿が御野の狩に相違無い……が與三兵衛此畫の内に花も實も有る情を知つた武士が有るか心得て居やうな……」梶川「ヘエー花も實も有る情を知た武士……」と暫く人物を眺めて居たが」梶川「畠山重忠で御座いませうか……」相摸「否とヨ其人は智仁勇、三德兼備の名將だが狩場には目に立つ事は無かつたやうだ……」梶川「和田義盛……」相摸「其人は士所の別當で勇將には違ひ無いが狩場には効は無つた」梶川「仁田の四郎は如何……」相摸「此日猪を退治た勇士、情人とは云はれまへ」梶川「狩野助は如何」相摸「白き鹿を一矢に射止た剛者、今云ふ通り是も仁者では有まい……」梶川「鹿は如何……」相摸「ヤレ〳〵與三兵衛に知らぬと見にたり、かわらに髪を結上て薙刀持て立居るは確かに御所の五郎丸花も實も有る仁者と聞く……與三兵衛貴樣訓文は讀むか讀ぬか知られぬ共讀む度毎に思はず涙の流るゝは河津三郎が遺子一幡丸、曾王丸……成長爲て五郎十郎、十八年の天津風父の仇工藤祐經、時來つて建久四年、富士の狩鞍スワヤ時あそ來りしと悅び勇む兄弟二人、緣者を便り、從者と成り、此狩場へ入込で機を伺ふ時しも有れ、五月廿八日の大雨は天の給はる僥倖ぞと、暗夜に紛れた陣屋に入込、那方此方と探す內松明携へ來りしは其夜當番御所の五郎丸、見とがめられぞと曾我兄弟、樹立の間へ小隱せしを早くも見て取る五郎丸、曲者待てと云はんと爲しが待て暫し夜目遠目定かにソレと知れねども、曾我の祐成時致と見たは僻目か、兄弟此處まで忍ぶ志は深き宿望有つて成らん、今曲者と纏掛て差出せば聊か功名手柄には有るあれど、武士の情見逃して彼に望みを遂させんと兄弟両人を見逃したと云ふ事だあア與三兵衛……」梶川「ヘエー……」相摸「然れば社兄弟の者充分

工藤を討取り逃も捨たる吾々の命、元の起因は鎌倉殿、一太刀怨み奉らん、腕を叩て頼朝の本營迄て暴込だり、此時御所の五郎丸此事聞て思ふやう始めは武士の情にて、一度は見逃し置きたれど、今はハヤ君に及向ふ叛逆人、イデ物見せんと覺悟に及び、五郎が進む傍らの小暗き處に、薄衣を頭に被つて蹲居る時致是を眼にかけしかど、婦女童子おらんのみと那方へ行くを通り過し、薄衣バラリと后へ掛げ、五郎の腰へむづと組付き大音聲……曾我の五郎時致は御所の五郎丸組止たり方々出合〳〵と社呼、つたり、此時五郎五郎丸を振拂ひ逃るは最も易けれど、先刻吾々兄弟を見逃し呉た恩人たり、逃も死す可き命ゆら寧そ此お人に縄を受僅に御身に報んのみと遂に五郎は五郎丸の手に捕られた題き、是りやアマア曾我の大本の様に思はれる、然れば五郎丸は花も實も有る真の武士……與三兵衛何と武士は然う有り度いも

のでは無いか、其事に引變今日は能々無念なれば社内匠頭、家を忘れ貴重の一命を捨家來の恩愛を不顧松の間の刃傷……上野介を討した後其方が内匠頭を取押へたら天晴仁者と謂つ可き也上野の傷は僅に摩擦傷のみソレを情無くも放して遣らず加之も場所は存じて居る覺悟の上、誰が知らんが武士の情ぢや放して呉れと再三再四、頼のんだる言葉も在に放して遣らんとは花も實も無き不仁者と、心無き表坊主までが三四人集まれば申して居る、相撲守も斯の如き情を知らぬ不仁者は大嫌ひで有る與三兵衛以後必ず〳〵我前を遮る勿れ其處罷り立……」と荒々しく被仰て與三兵衛」梶川「ハーッ……」と五躰が竦み逃るが如く土屋の御屋敷を出ましたが扨與三兵衛考へた」梶川「斯う多くの人に悪く思はれては五百石は扨置て元からの七百石の内へ這入るかも知れん是りやア倅に家督を譲ッた方が惜し

みが薄からう」と親爺の御番入を爲て居る悴に梶川の家督を譲りましたが五百石高が加つたので有升から與三兵衛は隱居爲て貴殿三…に暮して居りましたが不仁者、不覺者と云ふのが如何爲ても身躰を放れんから交際る友も爪彈きを爲て些少つたと云ふから長命を爲た樣で有升が墓無き日月を送つたものと見て升……却説此方は御老中方御内評定の上家康公御證文三十九ケ條に法つて淺野内匠頭長矩は大澤右京之太輔へ御預け其日に切腹仰せ付られ高岡源吾右衛門御遺言を承ると云ふ彼の切腹の一件で御坐い升

第十三回

元祿拾四年三月十四日は敵答の御日柄諸侯總出仕病氣忌引の外は在江戸の諸大名諸役人一同出仕に及ばる故に大手下馬先より白河口堀端迄人馬を以て雛を立るのすき地も無い程混雜致して居り升驅て四ツ半時城内の噂が聞にた物か殿中に於て誰傷有つたり即死我怪人も多く有る由風聞に成る然し誰方と及方の及傷かる哉更に分らんので各々主人を大切に思ふ處から一同供方は大手二重橋を望んで」ドーッ……」と込入て來る樣子に驚いて御目付鈴木傳左衛門二重橋へ立顯はれる有樣かな」鈴「此お不禮者の……唯今の喧嘩と云へば淺野内匠頭と吉良上野介より兩人共恙無く能り在る靜まれ靜まれ……」と云ひましたが此方は無數の若者が今押込んと爲る勢ひあれば中々聲は聞屆かず故に鈴木傳左衛門御作事方へ命令て松の板を五六枚取寄て走り書に」淺野内匠頭吉良上野介へ及傷致し候事兩人共恙無く罷在」と起り書に認めて」一同「ワッ〈……」と騒いで居る中へ那方へ一枚此方へ一枚分て放り付ると頭へ來た板が有るから」甲「アヽー痛へ……ウー是りやア思ひの外

喧嘩は小さい藪州の分家の内匠頭様と高家の吉良様……両人共恙無いとの事、俺の主人は大廣間詰……」乙「小生の旦那は帝鑑の間」丙「菊の間……」丁「御様傍詰……御座敷が違へば仔細は無かろう……」と云つて鈴木の謀計が好かつた計りに直に静まつて安心に及びましたが安心成らんは淺野内匠頭様随従頭茅野三平早見藤左衛門の兩人」兩人「アッ……」と云ふと早腰が抜け泣くにも泣れず茫然と爲て途方に暮れたる有様は實に道理と知られたり……此方に淺野内匠頭様は御徒士目付當番所に押籠に被爲つて白紙張の屏風で圍れ御小人目付が三人で守衛て居ると時計の間の内より御老中小笠原佐渡守殿がスラ〳〵と出て御出被爲た」佐渡守「アヽー内匠頭は狂氣で御座らう如何も本性とは思はれん多分發狂致したに相違無い亂心致したに相違御座るまい……」と相手が有る様に見ゆるが

其實僅々一人……此處が老中の情故に茲で内匠頭が取止らん事を大聲に御發し被爲と狂氣亂心と成て御家斷絶迄に及ばん御見込と見にて赤穂を御舍弟大學殿へ御讓りに成て是は元祿武鑑を見れば確に有升す御隱居で大學で亂れば御家繁盛……亦穂の上の館い處は出羽の山形か奥州棚倉と云ふ蛇の名物の所へでも國替に成て御家が殘る物ださうで御座い升扨て佐渡守殿の言を御聞被爲た内匠頭殿が」内匠「御重役の御情け誠に害はしう存ずるが此度拙者狂氣亂心と相成れば未來永遠恥辱を雪ぐに由なし、御場所柄を嫌はず家をも捨て乃傷致し候は止を得ざる事之有候にて狂氣に非らず本性で御坐る……」と内匠頭は判然と御答へ被爲たから小笠原殿は」佐渡守「アヽー是非も無し名家斷絶の時節が來たので有らう……」と謂つて力無く御立去り被爲たから、無據く家康公の御條目に法つて取計は

ねば成らん事に成て愛宕下田村右京太夫屋敷から青網目の拵つた乘物を持參に及んで白川口から内匠頭殿を御預り申上彼の駕籠へ入て多くの警護が附て愛宕下の赤い門の田村の屋敷へ内匠頭が御出に成る生憎田村右京太夫は御病中で御勝れ被爲ん斯う成ると屋敷の出頭が骨が折升然う斯う爲て居る内に其日も既に正七ツ時と成る今〻午後四時と云ふ時分田村邸へ御城使と爲て御來臨に成たのは大目付庄田下總守殿に副使と爲て岡野傳八郎御目付荒木重左衛門介錯人は御徒士目付から攝みに磯田武太夫御小人目付乘御城主と爲て乘込ました」「御上使……」と云ふと御門の扉がサッと左右へ開き升と意氣揚々と爲て御玄關へ御上使が御掛りに成ると田村の殿樣に代つて伊達監物御迎ひに及び」伊達「御役目御苦勞……イザ御通りを……と一同を御書院へ御通申し内匠頭樣御城使受と爲て末

座へ御立出に成た時は御顏色平常に變る事無くモー無念だ殘念だと云ふ御樣子は少しも見へん下總守殿悔中の狀書を御取出に成て」下總「上意ッ……」内匠「ハーッ……」下總「内匠頭大役を忘れ場合柄を嫌はず宿意を以て上野之介へ及傷致し候段不束に付き家名斷絶家祿沒收其の身切腹申し付くべしとの上意……」内匠「ハヽー……御法を犯し候拙者縛り首は殘て覺悟の處武士道の切腹仰せ付られ誠に有難き仕合せ、御受斯の如く御披露……」と整然御答へに成る是から内匠頭御仕度が髮つて無紋の小袖に無紋の上下……田村の御家來が髮を茶煎に結上て上げる三万石でも大名は大名見る〳〵御庭は御切腹の場所が四間四面でパタ〳〵と出來上る北處へ白羽二重の差合せと云ふ物を引詰て半紙四枚詰の白張の屏風が立廻る處へ徐々内匠頭樣御庭下駄を召て此場所へ御移りに成ると願いに依て

來國俊の短刀を恭々しく持て來る內匠頭の御膝許へ持參に及ぶ供饗と云ふは三寶の繰形の無い物を云ふ三寶は祝儀の使用物供饗は斯樣な不祥儀の時の使用物で有るから餘り好い物で無い然れば此の時に上田下總守殿には席を進み」上總「イヤ、ナニ田村家の臣監物唯今の內あれば內匠頭家臣一人に對面を差許す取計ふて遣し升る樣に……」副使傳八郎殿は」傳「イヤ〳〵容易ならん言を申渡さる卿人の內匠頭家臣一人に對面を差許され後日御重役より御饗の節は如何被爲……」下總「イヤ傳八郎殿其御懸念には及び申さず此下總が情を以て差許す以上は上より御饗賞有りたる時は斯く云ふ下總が腹掛切て御詫を致す貴殿の御腹は拜借致さん其の御配慮には及び申さん……」と云ふのは御城使が此處で達入の情を御見せ被爲た處……田村樣の若武士が早馬で鐵砲洲淺野內匠頭上屋敷へ御許しが出

たから」使者「大勢御出被爲ても無駄だから平日上の御氣に入の御家來を一人對面を許と云ひ離して早馬で歸る處で淺野の上屋敷は三日の內に家中殘らず引拂へと云ふ嚴命に落無く荷物を以て立退うと云ふので敗亡狼藉其混雜で中々田村の早馬の傳言を耳に聞付る者も無い上を下へと騷亂爲て居る此方は田村樣の門番が」甲「家へ預つた內匠樣へ御對面が許されたと云ふが家來の五拾人や八拾人出て來さうおもものだなの大名が臨終に一人も來ねへたア情けねへあア」乙「然うとも〳〵我々は五石二人扶の足輕だから安心で宜けれども御國表で枕部屋へ集り末期の水と云ふ介抱看病を爲るのに五万三千石の諸侯が今死ぬと云ふのに家來が一人も駈付て來ねへと云うのは心細い事ぢやァ無へか御同然に大名に生れなかつのは

倦怠せだ……」と出來あい相談を爲て居る……餘り刻限が延るから」下總「家臣は未だか……」監物が」監「未だ參上仕りません今少々御猶豫を願い升」と云ふ下總樣も少し待兼るの顏色見て居る其處へ馬を走かして來のは片岡源吾右衛門と云ふ人、殿中騷動を聞くと驚いて御城を差て乘附て見るとモー御頭けに成た跡なれば又馬の頭らを引向て愛岩下へと乘立て來たが片岡も實は逆上爲て居るから如何爲て能いやら分らんから田村樣の屋敷の前を往たり來たり爲て居ると」(本)「ヤー何家の武士だか馬の鬣古を始たせ……」乙「馬の稽古じやア無い抽者の考へじやア內匠頭樣の家來かと思ふ……」甲「何故」乙「逆上て居る樣子……又此方へ來たアイヤ其處へ御見へ被爲たのは內匠頭殿の御家臣では御座らぬか」片「ハヽー如何にも片岡源吾右衛門と云者……」

乙「失禮ながら御役目は御出頭以上席か

以下席で御座るか」片「御番所頭取を相勤める」乙「イヤ其は立派な御方……唯今の內あれば御城使より御家臣一名に臨終の際の對面を御許しに成て居る處ろ御早やく〳〵……」片「ハヽー……」と源吾右衛門はぱろぶが如くに馬より飛降田村樣の御門內へハラ〳〵……」乙「御心得も御座らうが大小を遠慮爲つしやいと云はれて刀を左手に引掴んで傍にハラリと放り出し兩人片岡の左右の手を引てツヽーッ……と彫みで前へ進み恰好ドタン場の樣な有樣で源吾右衛門庭口よりボーンと中へ突込れ踏脫の處へ兩手を突て低頭平身に及んで居る御縁近の處に內匠頭今朝の衣裝に事變り無紋の小袖、無紋の上下髮は茶煎に結上て優然と氣を落付て御控へに成て居る源吾右衛門涙あがら復び平伏に及び內匠頭シロリと御覽遊ばして」內「ヲー源吾左衛門が存生の對面は成間敷と思ひしが其方を見る

喊に悦あばしいが今と成ては其方迚も先立物は汝計り扨人は意氣地の無い物……然し其方に目通り申付た以上は茲に一ッの頼み有り勤て呉れイ……アイヤ田村家の匠料紙硯を借用願ひ度し……」幕の外で」匠「ハッ……」と……風流人が用ゐる文臺と云ふ樣な細少い机に墨筆式紙短冊半紙匠紙の用意が整て有つたから」匠「ソレ……」と云ふので幕張の内から其品を持てスカ〳〵と出て來て内匠樣の御前に持て來て回廻つて御城使に向て平伏爲て逃るが如く幕の外へ飛出て仕舞ふ、内匠頭樣御短冊を手に取上辭世を御考へ被爲のと見ゆるが急に出あかつた此處の處が少し苦々しかつたか辭世と云ふ物は手爾葉に違ひが有れば其辭世の有る間は耻辱に成る故に辭世と云ふ物は餘程心爲て殘さんけれは成らんが今腹を切らうと云ふ前には中々英雄でも考へ惱いだらうと思ひ升

第十四席

暫く考へて御出被爲折も三月拾四日田村の庭に今を盛りと咲亂れたる櫻花無常の風の吹く故か梢を離れて四五輪パラ〳〵と散て來る一輪の花が內匠頭殿の頬を撫てはお膝へパラ〳〵とゝまる其れを御覽被爲るが原因と成て辭世が纏った落花と云へば無常或は花落るの花を道具に使っても無常の此語が道具に成る樣です……筆を採つてスラ〳〵とお短冊へ御認め遊ばした歌は「風勝ふ花よりも又我はあは春の名殘をいかに遊ばして」內「アヽー源吾右衛門とかせん」長矩と寶名をお認め遊ばし心得違ひを爲ん樣……此短冊と血附の短刀は奥や弟の大學に遣るでは無い播磨の赤穗へ罷越し城代大石內藏之助に手渡し爲よ、予が無念じやと云つたと云へ冥土の旅は月夜の空を行くに等く勸よや源吾右衛門……」岸「ハヽー妻細承知仕りまして

御座い升奥様か大學様へ御遺言は御座りませんか」内「イヤ斯う成ては弟、や奥に心は殘らん死で行く身の氣懸りは予が短氣故家滅亡今より扶持に離れたる江戸本國兩様の家臣共が不憫だ哩……源吾右衛門」片「ハヽーッ……」と聲を放って男泣」片「有難き其御一言心骨に銘じ忘却仕らず……願くば御隨從腹を搔切て春の雪とも消度き心底……然は謂へ播州赤穗へ大切の御使ひ死ぬに死ぬざる我無念……」此時幕の外にて「遲刻致す……遲刻致す……門、去れ〳〵……未練と申するに立んか……」片「ハッ……ハヽー……」と心を殺して源吾右衛門お庭の外へ送り出さる内匠頭形を御直し遊ばして」内「上總守殿御身の情を以て家臣一人に對面を御許し下し置れ千万辱け無し且御役目御苦勞……傳八郎御役目御苦勞……重左衛門殿御役目御苦勞……武士夫

殿御役目御太儀……田村殿の御監物殿先刻鳥渡御主人の御病氣御見受申せし處餘程の御重病と存ずるに付き御大切に御養生……」と殘る方無く御挨拶相濟諸肌脫で來國俊の名刀の中央を紙持て卷聊か切先を出し心靜かに左の傍腹へプッリ……又右の傍腹へ横一文字に突通し一度短刀を拔」内「ホッ……」一息……再び以前の傷口を又二度目に御引被爲……一遍引た傷口を又斬り直すは更に屈せんと云ふ處を見せ爲被……内匠頭首を延して介錯を御待あさる後から一刀を以て」武「ハッ……」と斬と内匠頭殿の首は僅々天皮一枚で飛ずに居る半紙一狀が二ッ切に成て居る……半紙二ッ切を眞紙に用る物で無いと云ふは此時に用ゆるからで有升……其半紙半狀を左の手に取て髻を搔んで首を仰向て右の手の刀で搔首に爲て殘る半紙半狀を右の手に受て内匠頭の首の切口を紙[illegible]上に乘て左

の手で番を掴んで片膝立て内匠頭の右の横顔を御檢視に御見せあさる下總守殿床几を離れ進んで是を御覽被爲……是で御城使の役は濟みましたからズーッと皆引上て仕舞ひました扨内匠頭樣の御遺骸は僅た九人で擔に持て來て涙あがらに御死骸を頂戴爲て御墓提所は愛宕下萬年山青松寺で御坐い升が此寺は何を感じ損つたか長袖だから法律の噛分が出來あかつた物が變死を被爲た内匠頭殿を受取は宜しいが然う爲たらば御代々の御佛を祭つて有る寺へ賜寶が有るのもけんのんと云ふ處へ惑ひが出來で清松寺の和尚が手紙を附て御死骸を高輪の泉岳寺へ差送つた泉岳寺の住僧を酬山上人と云つて胴と腹の博學大才猫々才々と云ふ坊さんだから」「エ宜しい埋葬あらせやう……」と云つて那方御死骸を埋めて内匠頭樣を冷光院殿前朝參大夫水毛源利大居士と申上ました情を施すと必ず能く

報つて來るもので内匠樣の死骸を埋葬たれば社四十七士も那方引上て切腹も致し四十七人の墳墓も依然と爲て立て來に如何も泉岳寺では那物が大層寺を助けるそうで御坐い升が是酬山上人が德を施みしたる報いにて今ぢやア青松寺も口惜は思つて居るでせうが是詮方が無い扨此方は御話し跡へ戻て大手下馬先では早見藤左衛門茅野三平殿中及情の珍事を聞くよりも國表へ御注進申さねば成るまいと云ふて御用金三百兩懷中に及びまして栗毛春風の馬に乘り品川驛にて馬を乘倒して仕舞ひ駕籠を屈ひ押やら引やら金圓に明して擔くやら百五十四里を四日半日で播州赤穗へ第一に乘込城代大石藏之助此一大珍事を聞及ばれ御城内大評定の一件次回に申辨じ升

第十五席

此程播磨の國赤穗の城に凶事のみ有之り其一つは赤穗の大手

御門内の庭へ多くの蜂が群り集り戰う事三日に及ぶ彼等が巻りし跡に蜂の討死丘の如く纏て螫合戰……蛙戰……雀戰ひ抔は空氣に殺氣を顯し鳥獸へ自然と其氣を移者歟マア斯樣な事の有るは不吉の報せと往昔から申傳へて有る亦御城内の樣から黑煙が立昇つて城中に在る者は曾て知らず城外の御家來衆が」　臣「扨は出火あり……」と取る物も取敢ず集り見る……何の仔細も無いと云ふ怪しい事のみ打續く然れば城代家老大石内藏之助良雄が聞す語す」　内藏「江戸表にては我君饗應使御大役中續く凶事は何ぞ御役向に落度等有之譯では無からうかと他人には知らせず胸を痛め……アヽ一心遣いの事で有る」　て居ると三月十八日未だ役所々々が退ずに居る處へ遽しく小人目付が内藏之助の前へ出で」　目付「唯今江戸表より早打駕籠二挺乘込みまして御座る」　内藏之助」　内藏「スワ社吉事では無い必ず凶事で有らう……非常の事あれば苦しからん玄關先迄乘打を致させろ……源四郎殿蘊生藥の用意を致されヨ」　傍に居合した近藤源四郎と云ふ壯士が指圖に由て氣付の手當に及び御玄關へ大石内藏之助仝じく主税大野九郎兵衛、悴軍右衛門、玉虫七郎右衛門、坂田左近右衛門、奥野將監岡野金右衛門、皆一同重役が行儀正く居流れて居り升處へ」　駕夫「エッサ〳〵〳〵……と二挺の駕籠が其所へオッと下る　若武士がパラ〳〵と立懸つて駕籠の引戸を開て見ると茅野三平早見藤左衛門の兩人鉢巻を爲力綱へ捕つて口より黄色水を流して前後不覺に氣を失つて居るを手捺に爲て駕籠から外へ出し柔術心得の壯士が兩人の背を割て血道の通ふ樣に致して貝殼骨の下を彼の活と云ふ物で」　武士「城中だ……ハッエーイ……」　と入る兩人生氣に復し」　兩人「ウーン」　と眼を拔いて見ると向ふに重役が一同

に控へて居る三平藤左衛門氣を激まして」兩人「ハーッ……」と禮を施したが未だ氣が治まらんと見にて誰も居ない方へ辭儀を致した内藏之助が」藏「三平藤左衛門の兩氏遲しき早打の次第仔細は如何に……」藤「ハヽア一大事出來致したり孫て御承知の通り吾君勅使御馳走役御勤役中如何ある御意見にや御匠番吉良上野介殿は吾君へ指圖更に無之く會々御間合に是成ば今は御用多亦は後刻御傳授致さうとのみ云つて御立出被爲ん會々く傳達有る時は手違ひ等にて正しき傳達は無く是等種々の遺恨拾難く遂に去ぬる十四日敵答の御日拠四ッ半時殿中松の間に於て御前樣上野介へ御刀傷に及ばれまして御坐る尤も防ぎる者有つて僅の腰擦傷を負しのみ……私共兩人大手下馬先より御用金を懐中致し淺妻坂毛塚風にて出立致せしか神奈川の驛にて馬は疲濟しそれより人足を雇ひ唯今第一の御注進

と爲て能り越て御座る追々跡より仔細の急報も參るで御坐らうか先取敢ず此段御注申々上る……」此珍事を聞や大石「ヒ」を始め一統の者は」一同「アッ……」と云ふと忽ち顏の色の變ると云ふのは多分御家斷絶吾々も祿離れに成らうと云ず語らず心が通ふから一同顏蒼醒て居升と内藏之助膝を進せ」内藏「藤左衛門三平の兩人十四日の四ッ半時の珍事と有れば……」之助「扨折數へて」藏「四日半日に相成る扨〳〵遲い急報ヨ御身如き柔弱武士が江戸表に居れば社斯る珍事も出來爲あれ最少し速な急報を勤める者が有さうあ物あり……誰か有る狼狽士の大小をもぎ取り徒士目付當番所へ打込め」若武士「ハッ……」と云つてバラ〳〵と立掛る藤左衛門三平は案外の叱りを蒙り唯キヨロ〳〵爲て居るを引立て當番所へ打込みました父に於て内藏之助は近藤源四郎を近く呼で」藏「扨て近藤

……藤左衛門三平はさぞ氣を勞らして居る道理ある哉遠路の處昼夜を分たず乘込で來たのだから……一生懸命物語りを致す樣子、呼吸切の工合、眼中の光り……今一時に安心をさする時は心氣の釣糸斷て死するは必定……殺すは惜き若武士何卒勇氣を恢復爲して遣り度と思つたが差當つて施す詮も無いに由り怒りの氣を鋭どく持して置くの外は無いと考へる拙りは和郎に申付て置くから當今兩人が二六時怒つて居る樣に取計ふつて呉れろ」源「畏つて御座る……拙者は元來人を悦ばせるは不心得で御座る委細承知致しました」と退いて弱を拵へて兩人の居る處へ……總て此度夜を分たず無理な急報は食事を致しません食事を爲ると胃が揉て居るから吐て仕舞ふ吐ば腦へ感ずるから決して食事を爲んで唯氷砂糖を含むのみにて絶食で此大役を勤めて先づ注進の

役も終つて仕舞つた其處へ弱を持て來て呉れるから悦んで兩人一椀を喫し」兩人「代りを……」と云ふに」源「イヤ代りは成らん內藏之助の云はれるには那の樣な意氣地無しは存命爲して置くより」は殺す方が宜しいト……朋輩の好を以て內藏之助の眼を忍んで一椀を施して遣つた代りは成らん」此言を聞た藤左衛門三平烈火の如く憤り」三「內藏之助も噂に違つた不明の男子遠路の處を四日半日で來たりしを柔弱者とは何事ぞ……亦憎くきは近藤源四郎吾々を扱ふ縛犬猫の如く身躰が平常の如くあら摑み抗でも遣り度が何分今の身躰では仕方が無い……已れ勇氣が平常へ復したら近藤源四郎且は城代大石內藏之助も其儘には爲て置ん……」と怒つて自然と力も這入つて來るから其處でカッと絶入事が無い此事が內藏之助の第一に見込だ計畧と見ける……弱も分量を增て二椀位それより小

鳥の様な者を楽に付て段々三椀と食量を増て行く……却説内藏之助は歸邸無し騒動を聞くよりも城内に詰切で他人には相談も懇ずして」藏「此末路は斯う謀つて見やうと其策行はれすんば斯う爲て見やう該策も行はれすは斯の如く遂て見やう」と胸に問ひ腹に答へて急報を待て居ると中二日置いて二番の急報片岡源吾右衛門と聞て」藏「苦しう無い玄關先へ乘打を許す籠屋が」「エッサ〳〵……エッサ」と擔いで玄關先へ下す者武士が引戸を明て見ると第一番の注進の如く此人も前後不覺に成て居るのを手に爲て籠から出し介抱爲て活を當る心が注くは以前の如くで有升から暑くして申上升……近藤源四郎が氣付を飲せる源吾右衛門」に禮儀に及ぶ内藏之助源吾に向ひ」藏「片岡氏は江戸表の囚人一番の急報有つて承知致した其後は如何成行しか尋ね度御坐

る」問懸られて源吾右衛門」源吾「ワッ……」と計りに男泣き斯々に涙を拂つて」源吾「扨御一同申上るも先立は涙……扨暇でかあわぬ注進の役……吾吾九ッ半時白河口より愛宕下田村右京太夫殿の屋敷へ御預けに相成り其日夕七ッ時田村邸へ御城使と爲て上田下總守副使岡埜傳八郎御目附荒木重左衛門御渡りに相成り宿意を以て場所柄を顧ず大役を忘れ上野之助へ乃傷致し候段不束に付家名斷絶切腹申付可しとの上意……折能く某事臨終の御目見を許されまして是なる御短冊は御自筆の御辭世其帛は御生害に御用ひ遊ばされた國利の御血附の短刀……此二品は大石に渡せ此品大石の掌に入し時は將に冥土は花盛り月夜の空に往來を爲るに等しく唯予は無念で有つたと一言告よと云ふ御言葉以下は跡より亦々注進も御坐らう恐れ入たる次第で御坐る……」と片岡は涙れ入て泣倒れる……

……此二品を片岡の手から手順に段々大石の方へ運んで來る内藏之助は涙を呑込で恭しく御短冊を取出して拜見を致すと切腹の臨終に御認め爲被たとは云へ御墨艶も別に變りし事も無く震へもなければ擦れも見はず」風誘ふ花よりも亦われは猶春の名殘を如何に兎やせん　長「短」と認めて有るを押頂いて短冊を懷中に入れ二度目に扇を取て傍へ捨中より取出した來の國俊の短刀……其鋩を能く見れば在々殘る殺傷の血……」無念の涙胸に突掛るをグッと飲込み」藏「源吾右衛門何を申すもモー六日の昔滯拾日の期而て城受取の出張有るは何時頃と見込で參ッた」源吾「ハヽー……其處は未だ私考へません跡々の急報の者恐しく申上るで御坐ろう」内藏之助聲を激まし」藏「控へさつしやい御家斷絶と成る時の二番の急報の勸る處は城受取の心得は專一では有る御身如き行屆かん侍が江

戸表に多く有れば社稷る珍事も出來致す……それ狼狽侍の大小を受取儘目附當番所へ押籠ろ」若侍達は亦怒らせるものと心得て居り升から種々惡口雜言を爲て片岡を以前の室へ放り込で仕舞ふ是で大石は後の速打を待つと三度目の速打は徐程遲れて居る道理なる哉三番の速打は原惣右衛門藤原元時と云ふ五十三にある人が勸めた都て百里からの速打は二十二三から三十七八……モー四十と成ると少と勸兼る何でもモー年若で無ければ成らん其事を五十三に成る老人が勸めると云ふのは出來難い事だが三番の注進の人が無く成て仕舞つた公儀から内匠頭鐵砲洲屋敷を三日の内に引拂へと云ふ嚴命が下つて江戸家老の安井彦右衛門藤井又右衛門と云ふ者は御用金を皆犯し掠めて行方知れずに逃亡爲て仕舞つた跡の者は荷物を一ツ品も殘さずに持て行うと云ふので、前後不覺の騒ぎで有升原惣

右衛門は殿様の御後室を移し參らせ御實家の麻布龍土三万石淺野土佐守殿へ御預け申て内匠頭の御遺骸を頂戴致して万松山泉岳寺へ中村勘助を先導と爲て埋葬奉り……其事や此事やを一人で取仕切て江戸家老の代理を務め一番終に國の速打を勤るのも自分が行あひれば成らん事に成た此人は若年の折から病身で始終煩つて居る位で有升から」 惣「乃公は迚も活て赤穂へは還入れぬ必ず死骸で行くだらう何邊で命が終るか多くは藤澤の遊行寺邊りが落命の所だらう……」 と死でも用事の飲んやうに己れが遊る樣に……少と蓄蛔い位に書認めて其書を油紙へ包んで落ちない樣に確乎と駕籠の内へ納れ丈八尺の厚卷を爲て力綱に捕つて鎗砲洲の屋敷から東海道を差て」 人夫「エッサ〳〵……」 と人足共が宙を馳る樣に飛出しました」 惣「コレ〳〵人足共エヽ……何處迄參つた」 人足「藤澤驛で

す」 惣「ウン乃公の思つた藤澤の驛まで來たか未だ落命樣子も無い」 疾病の外は病身でも人間の身躰は強い者で内に駕籠は愈々〳〵宙を飛で參る」 惣「コレ〳〵此處は何處だ……」 人足「小田原驛です」 惣「諸……急げ〳〵」 人足「エッサ〳〵〳〵」 惣「何處迄參つた……」 人足「函根の山中で……」 惣「能い〳〵」 人足「エッサ〳〵……」 惣「何處だ」 此處は三嶋宿で御坐い升」 惣「ウム……人足「エッサ〳〵〳〵」 惣「何處へ來た」 人足「播州溜街道……」 惣「ウム」 人足「エッサ〳〵〳〵」 惣「何處だ……」 人足「赤穂の御城下へ還入りました」 惣「乃公は死あすに來た」 如斯では全で輕機球に來た樣だが……少しも驚らず赤穂の城下へ乘込ました」 のは身躰の强弱の差別では無い是れは本心の覺悟に有る處である……

第十六席

片岡源吾右衛門、茅野三平抔は江戸を出る時にモー本心は赤穂へ抜て來て少しも速く大石に面會を爲て討手の同勢を引受城を枕に討死を爲たものか但しは江戸吉良の邸宅へ斬込で討死を爲る者か如何は爲ん兎にも角にも大石と一致爲て事を謀らう……と江戸を出る時から身躰は隙が出來て居るから本心が身躰に座らぬ故に途中でグタ〳〵に疾れて仕舞ふ惣右衛門は惣「乃公は到底も存命ては赤穂へ這入れん死で行くものだ」と身躰を投に爲て少もし神經に迷ひが無いから身躰に凝がある無い是が所謂禪家で云ふ徹和法座動かざる事泰山の如く彼禪宗の悟道を貫いた我が善かんちうの奥義を學ばず爲て自然と其所へ往た者か……耶蘇基督の教に雨、雪、氷と隔ても惡事は働らくある善事は……假令小善ありとも是を盡せ必ず人間終る時は迷ふあヨ例へ肉躰は滅びても善は上天へ生を魂る此方の俗に高天

ケ原へ行れると云ふ教も佛の禪學も別に變った處も有るまへ然れば原惣右衛門優然と赤穂へ城下入を爲る」取次「三番の急使原惣右衛門……」と聞て城代大石は」大石「アヽー惣右衛門か存命はて居まい死骸で來たらう……元來虛弱な人……アヽ吾相談の一人を失あった此急使は外に幾らも血氣の者が有つたらう何う云ふ譯で勤めた事か今更悔ても詮無い事源四郎氣付を充分に用意に爲ろ……乘打を許すに由り玄關先迄入ろ……」亦其處へ役人がズーッと連あッて」人足「エッサ〳〵と玄關前に乘物が降る若侍が引戸を開るは前の通り釣出さうと爲ると人手を借す惣右衛門刀を杖に立出たが足に力が無い跟蹌々々とよろめくを」惣「ウン……」と刀に力を入て近藤源四郎が」源「氣付ヲ……」と出すそれを顧て」惣「イヤ夫迄には及ばん樣で御座る」源「ハッ……」と近藤手持無沙汰流石に拾

兼てグッと自分が服で仕舞い三日程眩軍が爲たさうで有升が壯健な身躰で劇藥を服ば何か應報が有のは當然でせう……」

惣「大石大野氏一同惣右衛門で御座る何を云ふもモー遁い云へば皆愚痴計り時節と諦めるの外は無い御切腹は兼て申上た者が御座らう御死骸を萬平山青松寺へ葬むらんと爲し處御分家藝州公から御内意有つて何分御死骸は受取る事叶はず迚右住職より高綱盤松山泉岳寺の玉道上人へ書面、夫を持參致して御死骸を泉岳寺へ御供致したる處玉道上人快く承知致して即ち泉岳寺へ葬り參らせ冷光院殿前朝參大夫水毛源利大居士是と我君の御法號で御座る江戸屋敷は三日の内に引拂へとの上意由て御後室は御實家麻布淺野土佐守へ御預け申上江戸家中の各々へは一先赤穂へ相集るやう御城代の指圖を仰ぐべき旨申渡し置きましたるに付追て當國に一同集會致すで御座らう

城受取の諸侯の入城は四十日の御免と見積つて御座る旣に申すも恐れ入たる次第で御座る」と首を捻つて惣右衛門述べ升ると大石義雄に置きましては」大石「原氏、貴公は何役を勤めて御出被爲た……江戸表に於て……」惣「江戸表で番頭を勤めて居りました」大石「何故番頭で有らう……」惣「番頭故番頭……大石「否々番頭は重役の一人事有る時は懸れ進め進退の下知を多くの兵士に爲す可き役目で御座る其重役の番頭が自ら兵士同樣の急使を御勤め被爲とは餘りと云へば輕々敷振舞あり御身如き侍が江戸表に多く有れば社拆樣なる珍事にも相成る……コレ狼狽武士の大小を受取徒士目付當所へ打込……」若侍「ハッ……」と立て引立る惣右衛門よろはひ〳〵立上つてポント又例の處へ入た」茅野、片岡「イヤ是は〳〵御老躰の御大役御苦勞千万に存じ升る」惣「貴公等も御大役御苦勞で御座る

早見「何うでゲス御番頭大石と云ふ奴は天晴な學者器量人と承はつたが見ると聞くとは大違ひ那んな目の見えぬ奴は有りません君々共両人へは々云の悪口定めし御番頭へも罵つたで御座らうそれに那の食事の進退を致す近藤源四郎と云ふ奴種々無禮な言のみを申して犬か猫の様に取扱ふ唯今迄は身躰が利んから我慢爲て居たがモー追々壯健に相成たから近藤は勿論大石迚も事に由ては捨置ん積りで御座る」惣「イヤ抑者も今狽狽侍と云ふ悪口を受て參つた時に大石の眼中に涙が一杯見えた是は何か那の人の策が有るかも知れんあながち内藏之助を無禮と御怨み被爲る」早見「イヤ何うも番頭は大石最貧だから不可ん那奴何が外に計略が有る人では無い」と云つて三名が腹を立て居る、内にドヤ〳〵江戸表より赤穂の城下へ集つて參るからモー宿泊屋に道入り

切ん位由て百姓家町人の二階を借て夫へ假住居を爲ると云を一時城下の錢廻りの好く成た事夥しい却説内藏之助は」大石モー江戸の急使の人々も常に復したで有らう改めて對面致さう……」と云ふのが三月廿七日四人を屋敷へ招じて黒紹一文宇の片衣で夫へ靜々出て參つて」大石「サ、此處へ〳〵……イヤ如何も原氏を始め此度の大役御察し申す右の中にも三平藤左衛門の両名四日半日の急使は此後は知らず今迄に例無い天晴の御手柄イヤ恐れ入た大小を皆さんへ御渡し申す」案外の言葉に三平藤左衛門顔を見合して稱揚たり叱咤たり爲る大石の心を疑つて居る其時に内藏之助躰を正して」大石「實に那の時の悪口定めし御憤りも有つたらうが各々方が急に安心を被爲る時は心氣の釣糸一度にゆるんで多くは一命終らはしやるで有らうと思ふ故何卒勇氣を恢復致させ度いと思ひしかど固

より頓智も無い内藏之助、別に施す策略も胸に浮ばん、如ず怒氣を起さするには と心にも無い惡口雜言此策行なはれて今日各々平生の如くに成られし段大賀の至り過日來の無禮は兩手を突て御詫を致す……」姑め て三平、藤左衛門、源吾衛門の三人は三人「アヽ扨は左樣か然うとは知らず大石氏を無禮ありと惡つて居たは吾々が却つて至らぬ處、尊公の庇蔭で命を逃ざ止たは悅ばしう御座る」大石「扨は御怒りは納まつて……」三人「何う致して……」大石「御怒りが納まつたら鉢巻を御脫被爲……」却説翌日が二十八日今日は御金圓配當の當日御金圓を藏から搬き出した在金が十二万兩……」大石「アヽ吾等が江戸に居た事なら吉良殿がモー澤山と言はつしやる程贈つたものを……跡で金策は何うにも成らう……と言つた處が愚知で詮方が無い」御金を分る役は御金奉行岡島惣右衛門、茅野三平の御

掛、り御金の右と左に立別れて雌犬、雄犬の樣に岡島惣右衛門、茅野三平の兩人が着座致して居る集つた者が八百三十六人流石に廣い御座敷にも座り切んから庭へ莚を並べて下の者は此莚の上に控へて居る內藏之助は」大石「扨て九郎兵衛殿御談じ申度い事が有る明日にも城受取の從人出張致したる節は禮を厚うして本城を御渡し申し吾々適宜に致した者が但しは此城に立籠り人數を引受戰ひに及んだ者か大野氏の御覽悟は如何あ物で御座る」九郎兵衛が」九「是は御城代事新らしき事を御問被爲倍臣は公儀有るを知らずと言ふは御主君より預る御城德川家より預かつた城で無い、故に將軍家の上意と雖も容易には渡されん城を枕に戰ひに及び敵を懲かせ愈々稱はん折は禮へ火を放つて切腹を致すは勤めかと九郎兵衛は心得る」大石「是は〳〵御美麗な御覺悟、拙者迚も同案ソレで安心仕る、然らば金

子配當は止ませう御同然に浪人を致せば吾々が便りに思ふは金銀財寶城を枕に討死致す覺悟で見れば金銀は有つて甲斐無い物配當には及ぶまいかと思ふが然り乍ら永い泰平の事でスワヤ戰ひと言ふ時狼狽爲て見苦しき事有つては吾君の御恥辱に成らう所謂今川胴の鎧か有つては成らんから矢張配當を致さう」　九「イヤモー配當に限る……大石が鳥渡キッカけた今川胴の鎧が有つては成らんと言れたが所謂座興……其座興の原因と言ふは德川氏一統に成て家康公を御御所と申上た跡は二代將軍秀忠公と申上た或時家康公御城の櫓へ乘て御覽被爲と城を出る大名城へ這入る大名嚴重に鎧櫃を擔いで交代を爲る樂々と見て居た家康公回顧つて」　家康「天下泰平は目出度あ……今交代の大名が擔いで居る鎧櫃は今川胴の鎧が多からうと思ふが何うだ……」　傍に居た高木作右衛門首を捻つて」　作「エヽも

ろあざね、里峯小川胴と申升は承はりましたが今川胴と申すのは未だ一見致しませんが如何云ふ拵へ……家康公御笑ひ被爲て」　家康「アヽ丁解んか……具た大石が言の葉の意味にも具足中空では不可んから金子配當を爲やうと申たので有る却説此お金配當に就て大石内藏之助が金箱を金奉行に命じて開させ山の如く小判小粒の蓄へを積上座敷に居る者庭前に集會爲る者の眼顏を見渡して忠義を貫ぬく者と然らざる者とを唯一見爲て大石右と左へ見拔と云ふ是が赤穗のスグリ評定と云ふ大石名代の智略の御話し

第十七席

臨時金奉行岡島彌惣右衛門茅野三平……在金拾二万兩愈々御金配當と事極り大石内藏之助が「内藏」總高十二万兩内三万兩引く岡島が　彌惣「三引九殘る……大野九郎兵衛膝進ませ九「夫り